



# この世界のこと



文風 冴月

「何年か前に奇病が流行りましてね。多くの人間が命を落としました。

私たちはもう、心の中は悲しみと切なさで一杯になりました……。

……然し、ある時、科学者たちが素晴らしい発明をしたのです。

それは一見すると、何の変哲もない細い金属板なのですがね。そいつを手術で以って脳の中に埋め込んでしまうのです。それでですね……。

……誰かが死んだ時にその金属板が大いに活躍するのです。人が死んだ時に、あすこに見える電波塔から、特殊な電波を国中の人の金属板に送るのです。

そして、その電波をキャッチした金属板は特殊な電流を流して、死んでしまった人が存在していた、という記憶を脳の中から抹消するのです。

そうすることで、目の前で死んでいる人間が自分と赤の他人なのか、それとも恋人なのかはたまた家族なのかは知る由もないのです……。

……そうやって私たちは人の死を乗り越えてきました。昔は本当に大変でしたよ。人がひとり死んだだけで、国中が涙で覆い尽くされていましたから。

今ではそんなことはないですけど……」

男は話し終えた。

悲しくないはずなのに、男の目じりにはうっすらと雫が溜まっていた。

黒い服の少年と、白いドレスの少女はそっと、男の前から立ち去った。

ホテルの一室に一人のフェキニアン（注・異星人）がいました。黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年でした。静かで黒い雰囲気はその周りを取り巻いていて、全体的に暗い印象を受けます。

黒い少年が、テーブルの上にある青い表紙の本を見つけて言いました。

「……なんだろう、この本」

中身をパラパラめくって見ても、この星の文字で書かれているので、中身は読めませんでした。ところどころに挿絵や何かのグラフ、年表のようなものが記されていました。

その時、ノックの乾いた音がして、ドアの向こうから女の子の声が聞こえました。

「ねえ、シン。仕度できた？ 早くしないと昼食が食べれなくなっちゃうよ」

シンと呼ばれた黒い少年は、その声に答えます。

「……ああ、今行くよ」

ドアの向こうには少年とは対照的に、白い清潔なドレスを着ている少女が立っていました。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていました。

シンはひとまずこの本のことは忘れて、食事にしようと思いました。

このホテルにはレストランが五つほど配置されていて、バイキング形式のものや、東のラーデルの料理が食べられるレストランがあります。

「うわあ、どれにするか迷っちゃうね」

白い少女がシンに言いました。

「……アトーネ、他のお客さんもいるんだから」

「はい」

アトーネと呼ばれた少女が素直に答えました。

二人は皿に好きなものを好きなだけ、盛れるだけ盛って、席に着きました。

いざ食べようとする、ホテルのアナウンスが流れました。

「六〇五号室にご宿泊のお客様、六〇五号室にご宿泊のお客様、大至急一階フロントまでお越しください。繰り返します――」

六〇五号室には聞き覚えがありました。

アトーネとシンは目を合わせて、

「六〇五号室って……」

「……僕の部屋だ」

そう呟きました。そしてシンは、

「……アトーネ、君は食べていていいよ。すぐに戻ってくるから」

しばらくアトーネは離れていくシンを見ていましたが、その背中が角を曲がって見えなくなると、フォークとナイフを手に取りました。

「……そうだったんですか」

シンは一階のフロントで納得したようにそう言いました。ホテルの事務員が言うには、シンの部屋にあった青い本は、前日に宿泊していた人の忘れ物だったらしいのです。そして、先程その前に泊まっていた人から電話があり、青い本を取りにくるという話だったのです。しかし、ホテルの事務員も勝手にシンの部屋に入ることができないので、このようにフロントに呼んだのです、というような意味のことをこれより数倍きれいな言葉で言われました。

「すみません、お客様。どこにいらっしゃるのか分からなかったので、このような形に……」

「……いえ、いいですよ。それより、すぐにその本持ってきますから」

とシンが言うと、事務員は滅相もないと言って、慌てながら続けました。

「お客様をここにお呼びしたのは、何もその本を取ってきて欲しいからではありません。確認をしたかったのです」

「……別に勝手に入って取っても良かったんですけど」

「いえいえ、そのような失礼な行為は決して致しません」

「……それで、その本はもう？」

「ええ。許可をいただいた後にすぐに連絡をとって、本を回収致しました」

そこでシンは、ずっと気になっていたことを事務員に尋ねました。

「……それで、あの本は一体何の本なんですか？」

「ああ、あれは歴史の本ですよ。昨日まで学生たちが旅行で宿泊していたのです」

「……じゃあ、教科書みたいなものですか？」

「そうですね」

シンはそれで全て納得がいきました。あのグラフや年表のようなものの意味が分かったからです。

その時、事務員はあることに気づき、

「あの本が何か分からなかったということは、フェキニアンですか？」

「……はい」

「そうですか、それは無理もありません。この国の人たちにとって、歴史がどれほど価値のあるものなのか理解してないでしょうから」

「……どういう意味ですか？」

事務員は待っていました、と言わんばかりに話し出しました。

「おかわり……じゃなかった。おかえり、シン」

レストランの前に設置されているベンチに腰掛けていたアトーネが、腹ペコで今にも倒れそうなシンを見てそう言いました。シンがこの国の歴史を一時間以上も聞かされている間、アトーネは昼食の時間をフルに使ってご馳走をたらふく食べていたのです。

「……アトーネ、もう昼食の時間は終わりかい？」

「残念だけど」

「……」

シンは絶望した顔でレストランの入り口にかかった、CLOSEと書かれている札を見ました。

「それで、何があったの？」

アトーネが生き生きとした顔で聞きました。シンは溜息を吐くとアトーネの横に腰を下ろしました。

「……いろいろあった。何から話せばいいのか」

「大変だったんだね」

「……君は僕が苦しんでいる間、美味しい食べ物を……」

「もう。男の子でしょ、泣かないの」

しばらくしてシンは話し始めた。

「……話すと長いんだけど――」

「昔この星は人口が激しく増加していました。日に日に少なくなる食料や住む場所。飢えに苦しみ、亡くなられる方もいたそうです……そして各地で戦争が起こり、家畜たちが奪われ、と色々ひどい時代だったそうです……人口が増える、ということは工業や産業が発展していたということです。つまり、医療もそうでした」

「……それで、どうなったんですか」

「当時の政府が出した政策の名前は『人口の過度の増加に対する人道的かつ合理的解決』。これは歴史の教科書では最も有名な語句です。まあ、旅人の方は知らなくて当然ですが、この国の人たちは誰でも知っています。そして、この政策の甲斐あって人口は平均時の数まで減少しました。まったくもって素晴らしい！」

「……」

「ああ、すいません、つい熱くなってしまって。それで、その政策というのですがね、まず国際会議を開きます。これは各国の一番偉い人たちが集う会議です。そしてそこで、一つの国からその国の人口の半分の人数を選び出すのです」

「……どういう意味ですか？」

「つまり、その選ばれた人たちは殺されるのです」

「……」

「このことによって人口は半分になりました。もともとの数の二倍以上になっていましたから丁度いい感じですね」

「……反対する人はいなかったんですか？」

「もちろんいましたよ。でも、そんな人間は即刻逮捕されたそうです。だってそうでしょう、人口が減れば、食料も仕事も手に入らなかったものが、手に入るようになるんですよ。たとえ命を奪う結果になったとしても、二人に一人は助かるんです。二人とも死ぬよりはいい気はしませんか？」

——とまあ、大体こんな感じで」

「お疲れさま、シン」

ふあ、と欠伸をするとアトーネは、軽く伸びをしました。その姿に、シンは絶句してしまいます。

「……君、まさか今まで寝ていたのかい？」

「そ、そんなこと……」

「……本当に君って奴は……」

がっくりと肩を落としシンはうな垂れました。

「……もう一回なんていっても嫌だからね」

「大丈夫だよ、うとうとしたのは最後のほうだし。全体像は掴んだから安心して」

「……やっぱり寝てたのか」

シンは小さく呟くと、気だるそうに立ち上がりました。

「あれ、どこか行くの？」

「……部屋に戻るよ。ここにいる意味もないしね」

シンが歩き出そうとすると遠くの方から声が聞こえました。

「シンさん！」

シンとアトーネが後ろを振り向くと、そこにはシンと話していた事務員と、見知らぬ少年がいました。

「誰、あの人たち？」

「……一人はさっき話してた事務員。もう一人は、知らない。誰だろう」

二人はシンの前まで来て、事務員が口を開きました。

「たびたびすいません、この子が歴史の教科書を忘れていった少年です。お詫びがしたいとこのことで」

シンは少年を見ました。片手に青い表紙の歴史の教科書を持っていました。

事務員が去っていくと、ベンチにはアトーネだけが座り、その前にはシンと、ヘンスと名乗る少年が立っています。

「あの、このたびは本当にご迷惑をおかけしました」

「……そんなたいしたことじゃないさ。僕じゃなくても放送であんな風に呼び出されたら、誰でもこうしていたさ」

シンはさらりとそう言いました。

ヘンスが何か言いたそうにしていると、アトーネが横から言いました。

「でもなんでそんなに大事な本を忘れていったの？ この星の人たちにとって、とっても大切なものなんですよ？」

確かにそこはシンも引っかかっているところでした。何故そんな大事な本をテーブルの上に忘れたのでしょうか。

「あの、実を言うと僕、わざとその本を忘れたんです。もうそんな本見たくないから」

「もしかして、勉強が大、大、大、大っ嫌いとか？」

「……そんなわけがないだろう、アトーネ」

シンはまっすぐにヘンスを見てこう言いました。

「……君はこの星の歴史に好意を抱いてないんだね？」

「うん。だって、こんなの間違ってる……教科書も本当は取りに戻るつもりはなかったんだけど、先生が勝手にホテルに問い合わせちゃって」

ヘンスはそこで一旦言葉を区切りました。それから言葉を慎重に選びながら話しました。

「旅人さんなら、その……分かってくれるよね？ 僕たちの歴史がおかしいことくらい……夜、一人になるといつも考えるんだ……確かにあの政策は沢山の人の命を殺したけど、その、多くの命を救ったんだ……だから、今僕たちがここにいられる。でも……僕には人殺しの血が混ざっているとしか思えないんだ……政策の生き残りが僕たちの祖先なんだ。つまり、その……生き残りというのは、その……」

大量殺戮者と、同じなんだ。

ヘンスはもうそれ以上言葉が続きませんでした。ごめんなさい、変なことを言ってしまって、とヘンスは言い、駆け出して行ってしまいました。

後にはシンとアトーネだけが残されました。

「……部屋に戻ろう、アトーネ」

「うん」

二人は無言で部屋に戻りました。シンの隣の部屋がアトーネの部屋です。

別れ際ふとシンが思い出したように、アトーネに尋ねました。

「……アトーネ。君ならどっちを選ぶ？」

「何？ いきなり」

「……二人とも死ぬのと、二人に一人助かるのは、どっちの方が幸せなんだろう。一人でも生きている方が幸せなのかな？」

アトーネはたっぷり悩んだ後こう答えました。

「そんなのその時考えるよ。今は二人いるんだもん」

そう言うと部屋のドアを開けて中に入ってしまった。

シンも同じように自分の部屋に入りました。

そして、後ろ手にドアを閉めてこう呟きました。

「……二人とも死ぬのと、二人に一人助かるのでは、どちらが幸せ……か」

自分ならなんと答えるだろうかと、シンは空腹を紛らわすためにベッドに潜り込みました。

赤茶けた土がどこまでも広がっていた。地面の起伏が激しく、山々が連なり、ごつごつした岩石が散在していた。

風が吹くと赤褐色の砂埃が舞う。

そこに、二人の人間がいた。二人はどちらもフェキニアン（注・異星人）で一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていた。

「うわあ、シン、見て見て、岩だらけっ」

シンと呼ばれた黒い少年は煙たそうに答える。

「……アトーネ、そんなの、いちいち言わなくても見れば分かる」

アトーネと呼ばれた金髪の少女はめげずに言う。

「もう、そんなに冷めないでよ。ノリが悪いぞノリが！」

そう言ってアトーネはシンの背中をバシバシ叩いた。

「……痛い痛いっ。やめろって——」

シンはアトーネに抗議したが、いきなりとんでもなく大きな音が聞こえてきて、遮られてしまった。

「な、何？ この音」

「……音？ ……いや、これは声だ」

「声？」

「……ああ」

シンの言う通り、何かを言っているように聞こえたが、余りにも大きすぎるので判断しにくかった。

「声って言ったって、いくらなんでもうるさすぎるよ！」

「……だけど、何か言っているように聞こえないか？」

「えっ？ 何て言ったの？」

どんどん声の大きさは増すばかりで、ついにはこんなに近くにいるのに怒鳴り合わなくてはいけないくらいになった。二人は声の発信源まで行ってみることにした。

そこにはひととき大きな岩が、ごろごろと転がっていた。

近づくにつれて段々と大きくなる声に、二人は耳を両手で押さえながら前に進んだ。しかし、耳を塞いでいるにも拘らず、大きさは全然変わらなかった。

二人は辺りを見回すが、声を発しているような人物は見当たらない。

これだけ大きな音なのだから拡声器でも使っているのだろうと、シンは踏んでいたが、結局そ

れらしい物は何も見つからなかった。

「……誰もいない……それじゃあ、何の音だ？」

シンの眩きは、大音量の声にかき消されてしまい、自分でもよく聞こえなかった。

ふと、声が止んだ。

いきなり静かになったので、辺りがさらに淋しい感じを漂わせていた。

「止んだね」

「……ああ」

風が、ざあっと吹き、砂埃を舞わせる。

「旅人さん、今の私たちの合唱はどうでしたか？」

突然、背後から声がした。

その声はさっきまで聞こえていた声のようだった。

アトーネとシンはほぼ同時に後ろを振り返る。しかし、そこには誰の姿もない。

「あれ？ 誰もいないじゃん」

「……だけど、今、確かに声が――」

「旅人さん、ここですよ」

声は、足元から聞こえた。

足元には、

「岩が喋った！」

「……」

そう、岩がいた。

あった、ではなく、いた。

「あなた方は旅人さんですよ？ もう一度質問します、今の私たちの合唱はどうでしたか？」

そのぺらぺらと流暢に言葉を話す岩には目だけがあった。口は、なかった。

とても奇妙な光景だった。

「あ、あの、合唱ってさっきのが、ですか」

「……アトーネ、まだ正体が分からないのに仲良くなろうとするな。ついこの前、それでどれだけ苦労したか忘れたのかい」

「あ、うん、ごめん……」

シンの忠告にアトーネは素直に謝った。

シンとアトーネのやり取りをじっと眺めていた岩が、重い口を開いた。

「ええ、そうです。さっきの大合唱、お聴きになったでしょう。ですから、私どもに点数をつけて欲しいのです」

言葉は丁寧だが、早く点数が知りたい、という感情が滲み出ていた。

「……点数？ 一体それはどういうことです」

シンはアトーネと岩との間に割り切って言った。

「よく分かんないね、シン」

アトーネも首を傾げていた。

「そうですか。では、きちんと説明しましょう。私の名前はガルドといいます。私どもは何人かでまとまって、合唱団を作ります。そして、時折訪れる旅人さんに歌を披露して、点数を聞き、その点数で他の合唱団と勝負をするのです」

「へえ、面白そうだね。でも君たちしか歌ってなくない？」

「ええ、妨害行為は違反ですからね」

「妨害行為？」

「……ひとつの団が歌っているのに、他の団が割って入っては点数に支障が出る。それが妨害行為って言うんだろ」

「はい、そうです」

ガルドの後ろから、合唱団員だと思われる岩たちが大勢やってきた。

「ガルドさん、この方々が旅人さんですか？」

「ガルド、今回は何点だったんだ？」

「きっと、九十はいくだろうね」

「そりゃそうでしょう、あんなに練習したんですもの」

思い思いのことを言う岩たちを、ガルドは一生懸命に宥めようとしていた。

「まあまあ、皆さん落ち着いて。まだ、点数を出してもらってないのです」

そう言うとガルドは、くるりと仲間たちに向けていた体を二人の方へ向けた。

「旅人さん、事情はわかったはずですよ。さあ、点数をつけてください！」

岩たちは皆、同様にシンとアトーネを見つめていた。

「え、えっと、どうしようシン？」

「……ガルドさん……僕たちはまだあなたたちの歌しか聴いていません。ですから、まだ点数はつられません」

「つまり、他の合唱団の歌を聞いた後なら、点数をつけてくださる、とそういう意味ですね」

シンは無言で頷いた。

二人はガルドと共に他の合唱団の元へと向かうことになった。

行く前に少しこの星の歴史について聞いた。

「この星にも昔はあなた方のような人間もいたのですよ。しかし戦争が起きて全滅、もう生きている人間はいません……ああ、何故我々が岩なのに人語を操れるか、不思議に思ったことでしょう」

「かなりねー。でも、もう結構慣れたよ」

「……口も無いのにどうやって喋っているんだ」

軽口を叩くアトーネのことは放っておいて、シンは尋ねる。

「別に口が無くても言葉を発することはできるんですよ。普通、人間は空気を振動させて意思を伝えますが、我々は電波を使って、脳に直接信号を送り込むことができるのです」

ガルドは誇らしげに言った。

アトーネはあまり意味を理解していないが、シンは大体理解できた。

耳を塞いでも音量が変わらないのはその為だったのだ。

ガルドの説明は続く。

「我々の体は七十％が『カロードライト』という特殊な磁気を放つ鉱石でできています。この特殊な磁気で、あなた方に直接伝えることができるのです」

「……『カロードライト』」

「ねえ、シン『カロードライト』ってき——」

シンはアトーネの言葉を途中で遮った。

ガルドは訝しそうにしながら、

「『カロードライト』というのはとても珍しい鉱物です。この星にはたくさんありますがね、ちょっと突っつけばぎくぎく出てきますよ」

そう言って他の岩を集め始めた。

「よし、みんな聞いてくれ。今からこの人たちを我がライバル、セドル団のところに連れて行く。そこでどちらの歌がいいか決めて貰おうじゃないか」

岩たちは口々にそれはいい考えだ、と口を揃える。

早速二人はそのセドル団という岩たちの元へと向かうことになった。

正直このまま帰っても良かったが、アトーネが興味津々だったから行くしかなかったのだ。

暫く谷と谷の間の、ごつごつとした歩みにくい道を歩いた後、急に開けた場所に出た。

「着きました。ここがセドル団のホームです」

そう言って、ガルドは前へ進み出て、

「ホーブ団、団長ガルドだ！ セドルはいるか？」

と大声で言ったが、谷の間にできた盆地に何の変化も起きなかった。

「あれ、いないのー？」

アトーネが不思議そうに、両手を口に当ててセルド団を呼んだ。

だが、またもや返事はなかった。

「……いない、みたいだな」

ガルドはこちらに向き直り勝ち誇ったように言った。

「やつら、もしや我々との勝負に恐れをなして逃げたのか？ はは、これは面白い、これで我々はここいら一帯のチャンピオンと言うわけですね」

他の岩たちも歓喜の叫びをあげていた。

「すみません、旅人さん、どうやら勝負はもうついてしまったようです。わざわざこんな所まで来てもらってしまってすみません」

「ううん。いいよ、別に。勝ててよかったね」

アトーネは笑ってそう言った。ガルドたちも満面の笑みで去っていった。

船に戻るとき、二人は知らない人間にあった。白衣を着た五人組の男たちがこちらに向かって

歩いてきた。大きなリヤカーを引っ張っていた。

「おや、旅の方ですか？」

白髪交じりの男がそう話しかけてきた。

「……ええ」

「おじさんたちは？」

男たちは目を輝かせて、

「これですよ」

と言ってリヤカーの中を親指でくいと指差した。

シンとアトーネが中を覗きこむと、たくさんの青色の石と五本のスコップが入っていた。

「……採鉱ですか」

僕はリヤカーから視線を外すと、そう尋ねた。

「無論そうですよ。ここでは『カロードライト』が多く出ますから」

アトーネが怪訝そうに、

「さいこうって何？ 最高？」

と聞いてきた。

「……採鉱。簡単に言えば石を掘るってことだよ」

「ふーん。そっか『カロードライト』って、すごく高く売れるってこないだ会った商人さんも言っていたしね」

アトーネが納得したのを見て、男たちは軽く自己紹介をした。

近くにある惑星の科学者で、その星では今、『カラディア』と言う感染症が蔓延しているらしい。死者が三百万人強も出ている危険な病気らしい。だが、『カロードライト』を磨り潰した粉末は『カラディア』の特効薬になると言う。そして、この星に例の『カロードライト』があると聞きつけて、発掘調査に来たのだった。

「……たった五人で来たのですか？」

「いえ、まだいますよ。分担で作業しているのです。どこかで会ったらよろしくやってください」

五人の顔には疲労の色が出ていたが、早く集めなくてはと行って、シンとアトーネの横を通り過ぎようとした。

シンは一つ気になったことがあったので、聞いてみることにした。

「……『カロードライト』はそこらへんを突っつけばざくざく出てくると、その、昔、聞いたのですが何故先へ行くんです？ ここら辺を掘ればいいんじゃないんですか？」

シンはそう言って地面を指差した。

さっきの白髪交じりの男性がひそひそと答えた。

「何でも、この星には喋る岩がいるそうなんです、会いましたか？」

「ああ、それならさっ――」

シンはアトーネの口を手で覆い、

「……いえ、会いませんでした」

と答えた。男は続ける。

「そうか、何でも彼らの体内には非常に純度の高い『カロードライト』が詰まっているそうなのです。ですからそいつらを見つけなければならないのです」

「そこいらにあるものの十倍は効果があるらしいからな」

と横にいた眼鏡の男も言った。

「……そうですか、でも、見つけてどうするんですか。喋るのなら命があるはずでしょう。そこから鉱石をとるなんてしたら」

「そうだよ。そんなことしたら可哀相じゃない」

しかし、男はさも当然そうに答えた。

「何を言っているんです、相手はただの岩ですよ。もちろんこのスコップで叩き壊すのですよ。こちらは人間の命がかかっているんです。命に比べれば岩の一つや二つ分けなないことでしょう。もとよりこの星は岩だらけなんですから、多少減った位でそう変わりはありませんよ」

「なのに奴らときたら……」

「そうそう。あんなでかい図体で逃げられるわけないのにな」

何も言い返せないでいる二人をおいて、男たちは先を急ぐからと言って行ってしまった。

アトーネとシンは船に戻るとすぐに、星を出た。

空気を振動させずに、声は届く。

宇宙空間に出ても、岩たちの悲鳴は止むことがなかった。

男たちは多分天秤にかけていたのだろう。人の住む星を守るか、岩の住む星を守るか。

そして、人の住む星を守ると決めたのだ。

シンもアトーネもあの星を出発してから今の今まで、一度も『カラディア』という病気で星が滅んだという話は聞いたことがない。

つまり、それは――

ある星のミネクトーヴァという街は、耕作と機械工業が共存する大都市です。

街の周囲には田畑が広がり、その周りを工場がぐるっと取り囲んでいる、円形の大きな都市なのです。

その街のある通りで、

「私は永遠に死なない！」

一人の男性が演説をしていました。男性は青いシャツに、薄い鈍色のジーンズ姿でした。

眼鏡がずり落ちそうになるのも気にせずに、大きな声を張り上げて道行く人々に必死に訴えています。

「私は絶対に死なない！ そう、永遠に生き続けるのです！」

その男性の前に二人のフェキニアン（注、異星人）がやって来ました。

一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪と、首から下がっている金の歯車を模したペンダントが輝いていました。

白い少女が不思議そうに尋ねます。

「死なないなんて、すごいね。本当なの？」

男性はにこやかな顔で頷きました。

「ええ、そうです。私は死なんのです」

白い少女が、感心して黒い少年に言います。

「死なないんだって、すごいね、シン？」

シンと呼ばれた黒い少年は、

「……なんでもかんでも鵜呑みにするのはいけないよ、アトーネ。まあ、まだこの人は生きているけれど」

アトーネと呼ばれた白い少女は、少し思案した後、

「うーんと、でもシン？ あれだよ、信じる、信じないは自分で決める、ってやつだよ」

そう言ってにこりと微笑みました。二人のやり取りを見ていた男性が口を開きます。

「そうです。信じる、信じないはあなた次第です。ただ、これは紛れもない事実ですけどね」

男性は胸を張って言います。自信たっぷりです。

シンは静かな目で訊きました。

「……でも、どうしてそんなことが分かるんですか？ 死なないという確信でも？」

「私が私の死を知覚することは、永劫有り得ないのです。それはあなた方にも言えること。シンさんも、アトーネさんも、自分自身の死をどうやって知覚するおつもりで？」

男性は眼鏡の位置をくいと直して言いました。その目はどこか曇っているようで、また妙

な清々しさがありました。

「死を知覚出来ないということは、死なないことに等しいのです」

男性はきっぱりとそう言い切りました。

アトーネはよくわからないといった顔をしています。

「……つまり、自分の死を認識できないなら、死ぬこともない、と？」

シンがそう言うと、男性は笑顔で頷きました。やっと理解して貰えたという、安堵の表情でした。

それから二、三言会話して、アトーネとシンは男性に別れを告げて、その場を去りました。

二人が去ってからも、男性の演説は続いていました。

少し後、アトーネとシンはあるカフェで紅茶を飲んでいました。

曇り気味の空の所為で、冷えた体が徐々に温まっています。

「あの人、本当に死なないのかなあ？」

最初に口を開いたのはアトーネでした。

「……さあね」

シンは興味無さ気に答えます。そして、一口、紅茶を啜りました。

アトーネは納得いかない様子で、

「さあね、って……真面目に考えてよ、シン」

やれやれという感じで、シンが話し出しました。

「……あの方は死ぬよ。人間なら誰だって、死ぬ……あの方がそれこそ不老不死だとでもいうなら、話は別だけどね」

その言葉に、ちよっぴりアトーネが体を震わせました。

シンはそれに気がつかない様子で、

「……でも、仮にあの人が死んでも、もしかしたら永遠に生き続けるのかもね」

ふっと笑って、シンが言いました。

アトーネが不思議な顔で訊き返します。

「どういうこと？」

その言葉に、シンは空を見上げて言います。

「……簡単なことさ。アトーネか僕か、はたまた別の誰かがあの方のことを忘れなければ、彼は永遠に死なないんだろうね」

その言葉に、アトーネは真剣な目で、

「じゃあ、私が憶えてる。死ぬまで、憶えてる」

死ぬまで、という言葉が妙に強調して。

シンと同じように、アトーネは空を見上げて言いました。

雲の隙間から一筋、光が漏れ出していました。



☆

「はい、それでは今月もナンバーワンはリコリスさんで一す！ リコリスさんの素晴らしい技術と巧みな表現。先生思わず涙してしまうところでした！ みなさんも来月では良い成績が残せるよう頑張ってください。それでは、帰りの会はこれで終わりです」

先生の言葉で委員長さんの号令がかかり、私たちは一日の授業を終え、帰ることになりました。

夕日が傾く空は綺麗な橙色で、南の空はすっかりアメジストのように紫に染まっています。窓の外には夕暮れの街がありました。レンガ造りの家々の煙突から、もくもくと夕飯を準備する煙が上がっていました。

私は鞆に、計算ドリルと連絡帳と筆箱を詰めて教室を出ました。

学期末といえども宿題はどっさり出ます。そのため、私の鞆は毎日とても重くて、くたびれるのです。

私は帰り道に寄り道などはしたことがありません。毎日決まった道を決まった時間に通る、ひどく機械的で無機質な生活を送っていました。

しかし、私は結構この暮らしが好きでした。

教室から昇降口までの道のりはそう遠くはないのですが、その道すがら多くの生徒が私のことを見ていました。

それもそのはずです。私は五年間ずっと成績優秀者として“天才”とみんなから呼ばれる存在だからです。

私は微笑みながら昇降口までてくてく歩きました。

みんなの尊敬、畏怖、羨望の表情が私の周りで蠢いていました。中には嫉妬もありましたが。

▼

やはりリコリスさんはすごいと思う。

五年間ずっと成績優秀者として、君臨してられる理屈が僕には分からない。

みんなは“天才”と呼ぶけれど、僕は違うと思う。

バカにしている訳じゃなくて、きっと彼女は努力しているのだ。

努力の結果が、今の“天才”と呼ばれるリコリスさんを形作っているのだ。

あの表情の裏はきっと、いつもの凜としたリコリスさんではないのだ。きっと。

そう友達に言ったら笑われた。嘲笑う表情で僕を見たのだ。そんなことを考えながら、僕は昇降口までの廊下を歩いた。

僕のクラスは三階にあるため、階段を何段も下りなくてははいけない。

廊下は生徒達で溢れていて、みんな思い思いのことを喋っていて、歩きづらかった。

昇降口につくと、そこにはリコリスさんが立っていた。

一人で自分の下駄箱とにらめっこしている。

僕とリコリスさんはたまにしか会話をしない。リコリスさんの周りにはいつも多くの女友達がいる、容易に近づけないのだ。

でも、きっと仲が悪いわけじゃないのだ、と思いたい。

リコリスさんの色が殆どなく色素の薄い、肩まで伸ばした細い髪の毛が、夕日にちらついていた。

細い体軀はいつもより弱々しく見えた。

☆

困ったことになりました。

この学校の下駄箱は、各生徒に一つずつ与えられた鍵で鍵をかけるシステムになっているのですが、しかし肝心の私の鍵が行方不明になってしまったのです。

これでは靴が取り出せません。つまり、家に帰ることが出来ないのです。

私が存分に困っていると、委員長さんが横から声をかけてくれました。

委員長さんは丸ぶち眼鏡をかけた男の子で、みんなにとっても親切な人です。成績はそれほどよくはありませんが、私の最も信頼できる人なのです。

「どうかしたんですか、リコリスさん？ なにか困ったことでも？」

委員長さんはぎこちない笑顔でそう言いました。

その優しさが嬉しかったです。

「あ、えと、鍵が、どこかに行ってしまったのです……」

私は困った顔でそう告げました。

委員長さんは、それは大変だと言って、私と一緒にじたばたしました。

「も、もしかしたら教室に忘れて来たのかも知れませんよ。一端、教室に戻りましょう」

委員長さんはそう言うと、私の手を引いて歩き出しました。黒い制服の袖口から出た白い手が、私の手をぎゅっと握ってくれていたのです。

委員長さんの暖かい温度が伝わってきました。

数分後、私の手の中には鍵が握られていました。金色に輝き、豪華な装飾が施された物です。まさか理科の教科書の隙間に挟まっていたなんて。

これも全て委員長さんのおかげです。

「ありがとうございます、委員長さん。これで家に帰れます」

委員長さんはえへへ、と照れた顔をしました。

私もとびきりの笑顔でした。

教室の外の廊下からは、まだ帰らずに残っている生徒たちのはしゃぐ声が聞こえました。窓の外の空はもうすっかり暗くなっていました。



「——おい、アスペン！ アスペンったら！」

「うわっ！」

目の前にいきなりアリウムが現れた。というか前からいたのだろうけど、僕の視界には全く入っていなかったということだ。

アリウムは僕の友達で背の高い少年だ。短い茶髪が印象的だ。

空の暗さを受けた教室の中には、僕とアリウムしかいなかった。

「どうしたんだ、ぼうっとして。俺が何度話しかけても、明後日の方向見て呆けてやがって」

「ごめん、ちょっとね」

僕は照れ隠しで上手くない嘘をついた。

すると、アリウムはこそっと僕に耳打ちをしてきた。

「なんでさっき一緒にリコリスと居たんだよ？」

僕はガバツと身を引いた。

「な、なな、なんでそれを……？」

「たまたま見かけたんだ。そんなことより、なんであんなやつと一緒にいたんだよ。絶対あいつ、あの顔の裏に腹黒くて悪……」

「そんなことない！」

僕は叫んだ。そんなことない。リコリスさんのあの顔に決して嘘偽りはないんだ。

「ま、別にお前が良いって言うんなら良いけどよ。でも、成績優秀者だぜ、あいつ。絶対……」

「まだ言うか！」

僕はアリウムに怒って言った。アリウムは急ににやりと笑う。

「へへ、冗談だよ、冗談。そんなにリコリスが好きなら良いこと教えてやるよ」

何かを企んだ顔でアリウムは言う。

「な、何？」

「耳貸せよ」

「ちゃんと返してよ」

「分かったから、早く貸せよ。教えてやらねえぞ」

僕は素直に従った。

教室の中には僕とアリウム以外誰もいないのに、アリウムは一層声を小さくして僕に囁いた。

☆

車の通りの少ない、街の外れに私の家があります。

門をくぐると、その先には左右対称の庭が広がっています。幾何学模様刈られた芝生が、白い『トイライト』という石でできた道の両側にあり、その芝生の中心に大きな噴水があります。

道の中ほどまで歩くと、私を呼ぶ声がしました。

「おかえりなさいませ、お嬢様」

召使いたちが私を出迎えました。懇懃な表情で私を見ます。

「爺は？」

私が召使いの一人に尋ねました。

「ライラックさんなら今、お嬢様のお菓子とお茶を用意されております」

「お帰りが遅かったので、今新しいものと交換している最中なんです」

「ささ、お嬢様、外は冷えます。早く中に入りましょう」

召使いたちは笑顔で私の機嫌を損ねないようにそう言いました。

テーブルの上には湯気が立ち昇るティーカップと、クッキーの入ったバスケットが置いてありました。

私が部屋に入って行くと、それに気づいた爺が、

「お帰りなさいませ、お嬢様。どうかなされたのですか？　このようなお時間に帰られるなんて、珍しいですね」

「下駄箱の鍵が無くなってしまったの。それで鍵を探していたらこんな時間に……」

「そうですか。不安だったでしょう、お嬢様」

爺が温和な顔で私を見ました。その表情は外の冷えた空気で悴んだ私の心を、優しく温めてくれました。

「ううん。委員長さんがね、探すのを手伝ってくれたのよ。だから平気だった」

私は爺に向かって微笑みました。それを見た爺も安心したのか、ニコリと笑って部屋を出て行きました。

私は鞆を椅子の上に置きました。

制服を脱いでハンガーにかけ、お気に入りの白いカッターシャツを着て、黒いスラックスを履

きます。

早速、宿題を始めることにしました。

優等生であり続けるためには、家に帰って真っ先に宿題をすることがいいのだと気づいたからでした。自分に合った勉強スタイルを見つけるには色々と試行錯誤しましたが、結局今の形に落ち着いたのです。

宿題を早く終わらせ、お菓子と紅茶を少し食べて、それから夕食をお父様ととるとというのが私の日常です。

「今日の宿題は、えっと、計算ドリルと……」

「リコリス、ちょっといいかな」

部屋にお父様がやって来ました。

「どうしたんですか、お父様？」

お父様はとても高い地位に就いている役人さんです。私がこのような広い家に住んでいられるのも、お父さんのおかげなのです。

「お客さんが来ていてな。お前と話がしたいそうさ」

お父様はいつもの優しい笑顔で私にそう言いました。

「お客様？ ……一体誰なのですか？」

この家にお客様が来ることは多々ありますが、私の所へ来るのは大変珍しいことでしたので、私は訝しげな表情でお父様を見ました。

「西の応接間で待って貰っている。さあ早く行ってきなさい」

お父様の言葉に促されるまま、私は宿題を放り出して、客人の待つ部屋まで行くことになりました。

一体誰が来たというのでしょうか。



アリウムに教えて貰った作戦はこうだ。

まずリコリスさんの住む豪邸へ向かう。

そして、僕が委員長であるということを利用するのだ。これがこの作戦のポイントだ。

リコリスさんに会い、学級の連絡を伝えるのだ。委員長はそういう仕事も任せられるのだ。

僕の家は貧乏なので電話がない。

つまりクラスのみんなに知らせるためには、家々を回るしかないのだ。

そして、リコリスさんは僕の雄姿を見て感動するに違いない。それにリコリスさんの家に入れるという特典つきだ。

しかし、ここで問題が一つ。

連絡を伝えるためにやって来たといっても、肝心の連絡がないのである。

アリウム曰く、

「そんなの、自分で考えろよ、テキトーに。肩の上に乗っかっているのはスイカか？」

もしかしたら僕の肩の上に乗っかっているのは本当にスイカかも知れない。全くいいアイデアが浮かばないのだ。

どうしよう。

夜の寒い風がびゅうっと吹いた。このままではリコリスさんの家の前で凍死してしまう。

通りは人が全く通らないため、リコリスさんの家の前で立ち往生していても、誰にも見咎められることはなかった。

でも、一向にいいアイデアは浮かばなかった。

今日は諦めて帰ろうか。

うん、そうだ、そうしよう。アリウムに違う作戦を考えてもらって、出直そう。

そう思った時だった。

「誰かそこにおられるのですか？」

門の中から声が掛けられた。逃げよう、そう思ったが僕の足には力が入らずその場から動けなかった。

振り返ると一人の老人がいた。白いひげが口元を覆っている。

「あなたは？」

老人はそう僕に尋ねてきた。僕は意を決して答えた。

「あ、えと、僕はリコリスさんの友達で、委員長の……」

「委員長さんですか！？」

いきなりの大声に僕は驚いて狼狽してしまった。

「あなたがお嬢様は助けてくださったという、委員長さんですか？」

「え？」

「お嬢様から話は聞きました。さあ、中にお入りください。今日は冷えます」

「う、うわっ」

老人は僕の腕をがっとう掴んで屋敷の中へと引きずって行った。

僕は老人に引きずられながら聞いてみた。

「あ、あなたは？」

「私はお嬢様の執事でライラックと申します。召使いたちをまとめる役をしております」

つまり、召使いの中で一番偉い人ってことか。

って、そんなすごい人に捕まっちゃったら逃げられないよ……。

とうかかなんでこの人、委員長って言葉に反応したんだ？

僕の想いは虚しく、ずるずると引きずられていく音に掻き消されたのであった。

久しぶりのお客さんということなのですが、何故このような人が来たのでしょうか。

私は大抵の嫌なことは受け流せる寛大な心の持ち主ですが、他人の家でここまではしゃいでいる人をほほえましい目で見るとは、私には出来ませんでした。

お父様が招待したのか、それとも爺の知り合いなのかもしれませんが、何故私のところへ来たのか疑問に思います。

早く帰って欲しいものです。

私はとても不機嫌な顔で、目の前の客人を見ます。

「うわあ、これもきれい！ こっちの置物も！」

部屋の中に飾られている装飾品や置物を珍しそうに見ているのは、白い清潔そうなドレスを着ている少女でした。歳は私と同じくらいの十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いています。

「……こちら、アトーネ……すいません、アトーネがうるさくて」

私の前のソファに座っているのは、黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

整った顔立ちで、一見冷たい印象を受ける目をしています。

さっきから狂ったように騒いでいる連れの、アトーネという子に手を焼いているようです。

「……い、いえ。大丈夫、ですよ」

私はぎこちない笑顔で、黒い服の少年、シンさんに答えました。

まったく、何故シンさんのような、落ち着いた物腰で温和な性格の殿方と一緒に、あんなにもうるさい女の子がくっついているのでしょうか。

絶対につりあってないと思います。

あんな子より、私のように清楚で可憐なお嬢様タイプの方が良いのです。きっと。

しかも聞くとところによると、二人は今まで色々な星を巡って来たのだとか。

「……アトーネ、そろそろ座って、話を聞こうよ」

シンさんがアトーネに向かって言いました。シンさんも相当お困りのようです。

ここは一つ私が。

「アトーネさん、気に入ったものがあったら、持って行っても良いですよ」

私のにこやかな提案に、アトーネは心底満足したようで、静かに置物を品定めし始めました。

シンさんは困った顔をしていましたが、私はシンさんに尋ねました。

「それで、シンさん、お話というのは？ あなた方が異星人であるのと関係があるのですか？」

シンさんと二人きりで会話するためには多少の犠牲はつき物。

それに私が長年、成績優秀者として君臨してきた実績が、この国のことを知らないフェキニアン（注・異星人）に通用しないはずがないのです。

「……実はさっき、君のお父さんに話を伺って、興味深いつて僕たちが言ったら、『私の娘は学校で五年間も成績優秀者に選ばれているから、是非話を聞いてもらいたい』って言われて」

なるほど。

お父さんは仕事で忙しいし、他の召使い達はそれほど有能でもないから、フェキニアンの方々にこの国の悪い印象を与えないようにという配慮ですね。

それに私は成績優秀者。

みんなが認める“天才”ですものね。

「じゃあ、話とはこの国のことについて話せばいいんですね？」

私が確認すると、シンさんは頷きました。

「どこまで知りましたか？ この国のこと」

私の重ねての質問にシンさんは、

「……この国が遠い昔から『仮面』を被った国なのだ、とだけ聞いたよ」

「それだけですか？」

「……そこまで君のお父さんが話された時に、丁度君が帰ってきたから」

「じゃあ、殆ど何も分からないでしょう。その説明だけでは」

「……むしろ謎が深まったよ」

シンさんはまっすぐに私を見て言いました。

視界の片隅でアトーネがグラッドマンの「朝の斜陽」という絵画を手を取っているのが見えました。

私は一回息を吐くと話し始めました。

「まず、この国が『仮面』を被っているというのは、どういう意味だと推測できますか？」

「……“近隣諸国などに嘘をついている”とか、“生まれたときから整形手術が施される”とかだと思ったんだけど、それが何故、成績優秀者の君が呼ばれたのかに結びつかない……だから結局のところ、よく分からない」

シンさんの言葉には躊躇がなく、自分の意見を素直に頭の中でまとめているというのが分かりました。

それでも、シンさんは分からないと言って、苦笑いをしました。

私は早速シンさんの困った顔を解消すべく、

「『仮面』という言葉にそれほど束縛的な意味合いは含まれません。比喻みたいなものです」

シンさんはまだよく分からないといった顔をしました。

「……そういえば、この国に入ってから、違和感を覚えていたことがあるんだけど」

「なんですか？」

私は何となくシンさんの言いたいことが分かりました。

やはりシンさんは賢明です。

「……上手く言えないんだけど、道行く人たちの顔がみな同じように思えたんだ。どこがどうとははっきり言えないんだけど」

「確かに！　なんか変な感じだったよね。あれってどういうことなんだろう？　ねえ、シン？」

横からいきなりアトーネが入ってきました。

シンさんの隣に腰を下ろします。

「……どうしたんだい、アトーネ？ 急に話を聞く気になったのかい？」

「選ぶのはまた後でいーや。それよりこっちで話を聞こうと思って」

「……ま、まあ、時間はたっぷりありますから。後で存分に選んでください」

なんでこの子はこうも私の邪魔をするの？

私とシンさんのスウィートタイムを。

時計を見て、まだ宿題も終わっていない、ということに気づきました。

「それでそれで？ この国について教えてよ」

アトーネが私の答えを急かします。

「じゃあ、答えを言います。この国の『仮面』というのは、みんな同じ“表情”をするという意味なのです。固定された“表情”しかないので、みんなが同じように見えるというのでしょうか」

アトーネは首を傾げていましたが、シンさんは理解した様子で、

「……そうか。僕たちが感じていた違和感はそれだったのか」

「でも、なんでそんなことを？」

アトーネが聞きます。

でも、その理由は、私たち国民は幼い頃から叩き込まれるので、容易に答えることができます

。

「昔、この国は強大な軍事国家として世界に君臨していました。そして、その時たくさんの人を殺すために、国民たちは自分の感情をも押し殺していました。そのため、戦争が終わってからも表情を作ることができない国民ばかりだったのです」

私はそこで一旦区切り、続きを思い出しながら話しました。

「そこで、政府は『表情固定化政策』をとりました。これによって、千を越える様々な“表情”が国民たちの間に普及しました」

「表情が普及するって、どういう意味？」

アトーネがまた質問しました。もしかすると、この人は何も理解してないのではないのでしょうか。

「学校で国語や算数で文字や足し算を教わるのと同時に、“表情”という科目があって、そこでは基礎の“喜怒哀楽”から始めて、学年が上がる毎に、より高度で難しい曖昧な“表情”を学びます。“表情”は固定されていて、笑う時は目を細めて、眉に力をいれず……と、やっていくわけです」

シンさんとアトーネは少し感心したような顔をしていました。

「私は成績優秀者だけど、それはつまり“表情”を作るのが上手いってことで……」

「表情を作るのがうまいなら、良いことなんじゃないの？」

アトーネが言いましたが、わたしは首を横に振って言います。

「いいえ。この国では“表情”は固定されているから、笑う時には“笑う表情”、怒る時には“起こる表情”をしなくてはいけないの。心に思っていない顔は作り出せないでしょう？ でも、私は殆どの“表情”が完璧に作れるの。つまり、心ではそう思っていなくても、簡単に“表情”を作ることができるの……まさに『仮面』ね」

「……でも、みんなそうなんじゃないのかな？」

「え……？」

シンさんの言葉は今まで誰からも言われなかった言葉でした。でも、それを確かめるのは本当に勇気がいることで。

今まで私はそのことから逃げていました。

この国が偽りで出来ているのを認めたくなかったのです。

「でも、それを認めるのはひどく勇気がいります。みんなが私を騙しているかもしれないなんて」

シンさんもアトーネも、黙って私の話を聞いていました。

私が泣きそうになるのを必死に堪えていると、ドアをノックする音が聞こえました。



屋敷の中は僕の家数十倍はあった。

リコリスさんはいつも、こんなに広い家で暮らしているのか。

僕の前を歩くのは、執事のライラックさん。

彼はリコリスさんから、僕が今日リコリスさんを助けてあげた、という話を聞いたらしいのだ。

リコリスさんが家で僕のことを話してくれている。

僕の心は宙に浮いたように軽くなった。

それに、もうすぐリコリスさんに会えるんだ。

でも、リコリスさんの邪魔にならないかな。

宿題とかやっているんだろう。きっと。

僕が色々と考えていると、ライラックさんが僕の前で立ち止まった。

「ここですか？」

そこには大きな木の扉があった。こんなに豪華な子供部屋なのだろうか。

ライラックさんは少し申し訳なさそうに言う。

「すみません、委員長さん。今日はお嬢様のところへもう一組お客が参ってしまして……でも、この国のことに興味あるお二方だったので、なにか話してあげてください」

「お客……？」

リコリスさんのところへ来るぐらいの人たちだから、きっとすごく高そうな服やら装飾品をじゃらじゃらつけた、お金持ちの人たちなのだろう。

ライラックさんは木のドアをコンコンとノックした。

きれいな音だ。ドアを叩いただけで、こんなにも良い音色がするものなのだろうか。

「お嬢様、お客様が参りました」

ライラックさんはそう言って、僕を部屋の中に招き入れた。

そこには、ふたりの異星人がいた。

一人は、白い清潔そうなドレスを着ている少女。歳は僕と同じくらいの十代半ばと言ったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていた。上気した頬が可愛らしかった。

もう一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。こちらも年は僕と同じくらいだ。

彼は僕を一瞥しただけで、リコリスさんの方へと視線を戻した。

ライラックさんが、

「お茶を用意いたしますので」

と言って、部屋から出て行った。

当のリコリスさんはというと、僕の存在に気づいていないかの様に、床を見つめたまま動かなかった。

僕は何か嫌な予感がして、リコリスさんの許へ駆け寄った。

「何があったんですか？ しっかりして下さい、リコリスさん！」

リコリスさんは虚ろな目で僕を見た。

そして、にっこりと微笑んだ。

「……委員長さん」

僕は平然とソファに座る、異星人の二人に怒って言った。

「お前たちだな！ リコリスさんをこんな風にして！」

しかし、彼らは全く動じなかった。

「大丈夫だよ、委員長さん……それに、彼らは悪くありません。私が考え事をしていたら、こんなことに……」

リコリスさんの顔はすっかり青ざめていて、今にも倒れそうだった。

僕はどうしたらいいか分からなかった。

黒い少年が、

「……それでは僕らはこれで帰ることにします。貴重な話、ありがとうございました」

そう言って、二人の異星人はソファから立ち上がった。

リコリスさんは二人を見て言う。

「シンさんに、アトーネ、さん。私は私なりの答えを見つけます……今までの勉強はきっとこのためにあつたと思います」

リコリスさんの探す答えが何かは分からない。

でも、異星人の言葉で、リコリスさんの中の何かが揺らいだのは確かだろう。

きっとそれは、昔から僕が感じていた違和感のようなもの。

黒い少年がドアの前まで行って、僕とリコリスさんに言った。

「……それでは、またどこかでお会いしましょう」

「じゃあね、リコリス。クッキー美味しかったよ」

白い少女は笑っていた。今までに見たことのない笑顔だった。

その時、僕の喉が勝手に動いた。

「ちよっ、ちよっと、待ってください！」

僕は咄嗟に彼らを引き止めていた。

「君たちは、自分だけの表情が造れるんですか？」

何を言っているんだ、僕は。

異星人の見たことのない、独特の表情に何を奮起させられたんだ？

「なんで、君たちは……」

僕の言葉はそれ以上続かなかった。

なんでこの二人は、思ったとおりに、感じたままに、表情を表現できるのだろう。

黒い少年が僕を見て言う。

「……リコリスさんがさっき言ったように、その答えは君自身が見つかるんだ」

それは死刑宣告をする裁判官に似ていた。

一瞬、彼が黒衣の死神のように見えた。

死神の審判は常に正しいが、残酷も「正」となるのだ。

それだけ言って、彼はドアノブに手をかけた。

「……行こう、アトーネ」

二人は木のドアを容易に開けて、颯爽と外に出た。

最後に白い少女が呟いた。

「一人では見つけられなくても、二人ならなんとかなるかもしれないよね、シン？」

シンと呼ばれた少年は、それには答えず、ドアを閉めた。

パタン、とやけに軽くつまらないその音は、いつまでも僕の鼓膜に張り付いて離れなかった。

急に泣きそうになった。

☆

次の日、宿題を忘れた罰で、私と委員長さんは校庭の掃除をやらされる羽目になりました。

結局、昨日私は全く勉強なんかできる気分になれず、朝までずっと考え事をしていました。

委員長さんも一緒だったのでしょう。

もう空は漆黒になりつつありました。

私と委員長さんは、今日は全く会話していませんでした。

私は表情を造ることの恐さに震えていたからです。

だから、三時間目の“表情”の時間は保健室で休んでいました。

保険室の先生の心配そうな顔も偽りなのかもしれない、と思うと本当に気持ちが悪くなりました。

でも、本当に怖いのは、彼の表情を見ること。

好きな人の表情が、嘘だとは認めたくないのです。

昨日、下駄箱の鍵を探そう、と言ってくれたあの時の笑顔だけでも本当であって欲しい。ただそれだけです。



もしかしたら固定された表情は、人間らしくないんじゃないか、と時々思うことがあった。そして、あの二人の異星人に会って、僕の違和感は確信へと変わった。

自由な自分だけの表情。

『仮面』を被らなくてもいい人生。

それは僕の望むところなのかもしれない。

別にそれは、成績が悪いからとかじゃない。

根本的に間違っているんじゃないか、と思った。

ただそれだけ。

でも、その全てを否定するには、国は大きすぎる。

なら方法は一つしかないんじゃないか。

頭では分かっている。

でも、いざという時に、僕は行動できない。一歩が出ない。手を伸ばせない。声が出ない。もう、そんなの嫌だ。

そう思う。

だから、彼女に一言言えばいいんだ。

答えは自分で見つけなくてはいけない。

でも、ここにいたら見つけられない。

だったら、



「僕と一緒にこの星を出ませんか？」

委員長さんが沈みかける夕日を背にして言いました。

最初、私は委員長さんが何を言いたいのか分かりませんでした。

でも、成績優秀者の脳みそをなめてはいけません。

委員長さんが何を言ったのか、私はすぐに分かりました。

「そうすれば、もう後戻りは出来ませんよ」

私は委員長さんをまっすぐに見て告げました。

「分かっています」

委員長さんは何か決意しているように見えました。

箸を持つ手が震えていました。

彼の震えが伝染したのか、私もいつしか震えていました。でも、答えは自分で見つけなくてはいけないのです。

それに……それに、一人では見つからないかも知れないけど、二人なら。

いつしか彼らのように笑える時が来るはずです。

「僕、リコリスさんがあの時なんで、あんなに気分が悪くなって、青ざめちゃったのか分からないけど……ええと、分からないからこそ、その、色々話して欲しいんだ。僕、余り表情、造るの上手くないけど、これからは自由な、自分だけの表情を作るように頑張るから……だから、その……もう、僕らには『仮面』なんて必要ないんじゃないかって思うんだ……えっと、一緒に行きませんか？」

私は涙を必死に堪え、委員長さんの声に、笑顔で頷きました。

夕日が完全に見えなくなると、世界は優しく夜に包まれました。

ある町のフガロという駅にその星の人に混じって、二人のフェキニアン（注・異星人）がいた。一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていた。

二人は駅の事務室にいた。

黒い少年が駅員に言う。

「……やはり、今日中には無理ですか？」

「ああ、すまないね。ベレイーダで大停電が起こっているんだ。コンピュータにデータが届きやしない」

「……そうですか」

黒い少年はがっかりして呟く。横にいた白い少女が、

「どうする？ 帰る、シン？」

シンと呼ばれた黒い少年が答える。

「……いや、もう少し待とう」

「そっか」

「……なんなら先にホテルに戻っているかい、アトーネ？」

アトーネと呼ばれた白い少女は首を横に振った。

しかし、待つとは言っても駅の事務所で、一体どんな暇つぶしがあるのかまったく分からない。シンは欠伸を噛み締め、アトーネと一緒に長椅子に腰掛けていた。

「そろそろ列車が来るな」

駅員はそう言うと言ち上がり、窓の外を見た。

数秒後、大きな甲高い音や重そうな金属音が入り混じって、列車がホームに停車した。シンとアトーネには事務室の窓からホームの様子が良く見えた。多くの乗客がぞろぞろと降りてきた。殆どの人が改札を抜けているのに、シンとアトーネは二人の男女が列車を前にして立ち止まって話をしているのを見た。事務室の窓は開いていたので、二人の話し声は筒抜けだった。数秒もしないうちに列車は二人を乗せずに発車した。

男が女を見て言う。

「やはり君は今の列車に乗るべきだったよ。君は下りなんだから、今の列車に乗れば家に帰れたんだよ」

女は涙の溜まった瞳で言う。

「そんな、あなたを一人で置いていくわけにはいかないわ。最近はすごく物騒なのよ、もしもあなたの身に何かあったら……そう考えると……」

「僕もだ。君を置いていくなんてできない……そうだ、いい考えがある」

いったん言葉を区切ると、男はさも名案だというような顔をした。女は興味津々な目をして男

に尋ねる。

「なにになに？」

「次に来る列車は上り方面だ。それに僕と君と一緒に乗る。確かその列車は僕が降りる駅で下り方面と入れ違いになるんだ。そして、君はその下りの列車に乗って家に帰る。乗り換え時間は三分あるから、大丈夫、間に合う」

「ええ、素晴らしい考えね。私はあなたといる時間を大切にしたいの」

数分後、上りの列車が来て、二人は一緒にその列車に乗っていった。

事務室の中でアトーネが言う。

「ねえ、シン。わたしたちももう帰ろうよ。もう夜の十時になるよ」

駅員もシンとアトーネを見てこう言った。

「そうですよ、お二人とも。たぶん復旧がかなり遅れているんでしょう。明日また来られてはいいかがですか？」

「……」

シンが何かを言いかけたとき、またも大きな甲高い音や重そうな金属音が入り混じった音を出して、列車がホームに停車した。シンの声はかき消されてしまった。

時間も時間なのであまり降りてくる人はいなかった。しかし、そこに先程の男女がいた。二人の話し声が聞こえる。

「ああ、やっぱりダメだった。僕は君から離れたくないから列車を降りられなかった」

「ああ、やっぱりダメね。私はあなたから離れたくないから列車を乗り換えられなかった」

男と女はほぼ同時にそう言った。

「このままさっきの列車に乗っていても、また同じことの繰り返しになっていただろうね。降りて良かった」

男が自嘲気味に笑う。

「そうね、でもさっきのが最終列車よ。もうそんな心配しなくていいのよ、明日考えればいいわ」

二人は微笑みあった。

「はあ、またかあの二人……」

事務室の奥で駅長が大きな溜息をついた。

シンと話をしていた駅員も窓の外を見る。そして、駅長と同じような溜息を吐く。

「まったく、なんでさっさと家に帰らないのかな」

「……いつからなんですか？」

「え？ ああ、二、三日前から。ずっとあの調子だよ。なんでも、お互い離れるのが嫌で家に帰れないらしいんだ」

「大変ですね」

とアトーネが真剣に心配している。シンはぷっと吹き出してしまい、アトーネの手刀が飛んできた。

それをひらりとかわしたシンは、窓から視線を外して駅員に向きなおり、

「……そうですね、ではまた明日来ます。迷惑をかけました」

「いえいえ。明日には停電の復旧も完了していると思います」

「……分かりました」

「それじゃあ」

シンとアトーネはお辞儀をして事務室を出た。

ホームではまだ男女が立ち話をしていた。距離があるのもう何を言っているのかわからない

。

夜の冷たい冷気がシンとアトーネの頬を撫でた。シンは駅のホームとは正反対の方向、ホテルのある方向を向いて言った。

「……さあ。帰ろう、アトーネ」

帰れない二人を置いて、二人はホテルへと帰っていった。

どこを見ても大草原が広がっていました。風が吹くと丈の短い草たちが涼しそうに揺れます。その緑の絨毯の上空に二人のフェキニアン（注・異星人）がいました。一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪と、首から下がっている金の歯車を模したペンダントが輝いていました。

少し暑い初夏の日差しが、二人よりも高いところから降り注いでいました。

「……それにしても、まだ信じられないな。空を飛ぶ自転車なんて。なあ、アトーネ」

黒い少年が隣にいる少女に言いました。アトーネと呼ばれた少女は微笑しながら言います。

「うん。わたしも最初は信じられなかったけど、こうして体験しちゃったもの。それに、自分で空を飛べるなんて……ああ、気持ちいい」

二人はその星でよった、ベルイーダという街で空中自転車をレンタルしました。

空中自転車というのは二人にはよく分かっていませんでしたが、とにかく飛ぶ自転車です。

「……原理はともかく、漕げば揚力が生まれるんだろう。なぜかはわからないけどな……昔聞いた話によると、『昇翔石』という鉱物があってだな。それに何らかの力を加えると、揚力が生まれる、つまり、浮かぶって事で——」

「まあまあ、いいじゃん。楽しければなんでもっ、ね、シン？」

シンと呼ばれた黒ずくめの少年が、それもそうか、と小さく頷きました。

そんなことを言い合いながら、二人は空中散歩を楽しんでいました。ふとシンが口を開きました。

「……そんなことより、こんなことしていいのか？ 早くアトーネのおじさんに会わなくちゃいけないんじゃないのかい？」

「うーんと……そだ、こうしていても、絶対に見つからないってわけじゃないし……もしかしたら見つかるかもしれないし……」

「……こんな草原のど真ん中でかい？」

「い、いるっ……かも、しれない、よ？」

「……よ？ じゃないよ」

アトーネは探すフリをして辺りを見回しました。

内心では、いたらいいなあ、ぐらいにしか思っていないんですけど。

しかし、その予感は当たりました。

「あれ？」

「……どうした」

アトーネが眼を擦ってもそれは消えませんでした。

最初は黒い点のような物でしたが、近づくにつれてはっきりわかりました。

なんと、草原の中にいるはずのない人が、草原の中に突っ立っていたのでした。

「こんにちはあ！」

「……うるさい」

アトーネは元気一杯に言いました。

でも、何故かその人は返事をしてくれませんでした。

距離が3モーツ（注・この頃の長さの単位。1モーツは約9メートル）も離れていたからかも知れません。

仕方がないので、もう一度言おうとして息を吸おうとするとシンが、

「……待て、アトーネ」

とそう言うので取り敢えずアトーネは黙りました。

シンがアトーネの前に進み出て言いました。

「……すみません、そこで何しているんですか？」

しかし、その人は何も答えませんでした。

アトーネとシンは首を傾げてその人の近くまで歩いていきました。

近くで見ると、それは人ではありませんでした。ネーラの木で作られたカカシでした。片方の手には泥で汚れたボロボロの軍手が垂れ下がっていました。もう片方には何もなく、細い枝の部分に小鳥が一羽止まっていました。顔はというと、目深に被った麦藁帽で表情は分かりませんでした。素材はこちらもネーラの木でした。

「なーんだ、カカシかあ、わたしはてっきり人かと――」

「お前らここで何してる！」

草の大地にいきなり大声が轟きました。小鳥は天高く飛び上がってしまっ、どこかに行ってしまうしました。

「まったくわしが居眠りしている隙に貴様らは！ ここの作物はやらんぞ！」

残されたのはアトーネとシンと大声で怒鳴り続けている、カカシが一人。

「……喋った」「喋った！」

アトーネとシンはほぼ同時に驚きました。自らの胴体にあたる木を折らんばかりの勢いで、ぐいっと前に出ながら二人に怒鳴りました。

木がきしんでギシギシという音が聞こえます。

「ちよ、ちよっと待ってよ！ わたしたちは別に作物をとろうなんて――」

「黙れ、黙れ！ そうやってわしを騙す気なんじゃろ！」

カカシはアトーネの言い分を聞こうともしません。

「……だから、別に僕たちは作物目当てに来たのではなくて、たまたまここに――」

「ええい、まだ言うか！」

シンも困った様子でした。

ふうっと一息吐くと、シンはアトーネにこう言いました。

「……このカカシと話していても埒が明かない。街へ帰るよ、アトーネ」

「う、うん」

カカシはまだ何か言っていました。

二人は街への帰り道、もうこの空中自転車についての感想もあらかた言い尽くしたので、あのカカシについて話していました。

「なんだったんだろうね、さっきの」

シンは暫く無言で、それから少し笑って答えました。

「……なんだったんだろうって、あれは――」

「カカシだろ、とか言わないよね？」

「……そ、そんなこと言うわけないだろ」

「じゃあ、なに？」

「……さあね」

シンはそっぽを向いてしまいました。絶対に凶星です。

少し走り、町が見えた辺りでシンが言いました。

「……町に着いたら宿屋の人にでも聞いてみよう。何か知っているかもしれない」

「うん」

アトーネは風を頬に受けながら、静かに頷きました。

あと三十分もすれば世界は闇に閉ざされるといった頃に、アトーネとシンは街に到着しました

。

門を潜るとき入れ違いに大勢の人が出て行きました。

アトーネはシンに聞きました。

「どこに行くんだろうね、こんな時間に。もうすぐ日が暮れるっていうのに」

「……さあね。まあ、ピクニックではないだろうね」

シンはそう言っておどけました。

そんなことを話しながらまずは空中自転車のレンタル店まで行きました。

レンタル店と宿屋は街の正反対の位置にあるので、宿に着くまで大分時間がかかりました。

昼はあんなに暖かかったのに、日が沈みかけている所為か、アトーネには肌寒く感じました。

暖房が適度に効いた宿に入ると、早速、シンはオーナーにあのカカシのことについて質問しました。

「ああ、あのカカシのことか」

「知っているんですか？」

「ああ、知っているさ。街では結構有名だよ」

「……そうなんですか、あの、もっと詳しく教えてくださいませんか？」

オーナーは一つ咳払いした後、こう言いました。

「ああ、俺の知っている範囲で良ければな」

「……かまいません」

オーナーはアトーネとシンの依頼を快く受け入れてくれて、カカシのことについて色々話してくれました。

「お前たちが、あいつに会っているなら話は早い。あいつ、ボロボロだったろう？」

「確かに……じゃあ、かなり古いカカシってこと？」

「まあなあ。これはいわゆる昔話だよ」

「……昔話？」

「ああ。あのカカシがいる地名を知っているか？……そうか、あそこは『フルノーゼム』という場所なんだが、その昔あそこでは耕作が盛んに行われているところでな、お城からも一級土壌地区として認定され、農民たちはさぞかし喜んだそうだ」

オーナーはここまで言う和一息つきました。

するとシンが口を開きました。

「……その時作られ、畑を守っていたのがあのカカシなんですか？」

「そうだ。もう二百年ぐらい前からあそこにいるんだとさ」

「に、二百年も？」

アトーネはとても驚いて、つい大きな声を出してしまいました。

二百年もの間、あのカカシはあそこで一人畑を守ってきたのかと思うと、胸が締め付けられる思いでした。

その時、シンが口を開きました。それはアトーネも薄々気付いていましたが、言い出せずにいたことと同じでした。

「……あそこに畑なんてありませんよね？ それにカカシを作った農民たちはどこに？」

オーナーは窓の外を見て言いました。

「あのカカシが作られた頃と同時期に、機械が急速に発達し始めたんだ。『昇翔石』の発見もともなってな。それがこのざまだ。見な」

そう言ってオーナーは窓の外を指差しました。ごつごつした人差し指が指す先には、紫色に染まる空の下に、細く伸びた幾本もの煙突、そして風にたなびく灰色の煙がありました。

黒い粉塵が巻き起こる、工事現場も見えました。

オーナーは手を下げると、話を続けます。

「ベルイーダにはもう畑なんかなくても、工場がある。作物を生産できる工場があるんだ。疑似日光と一定量の栄養と水分を与えてやれば、自然界にある作物と同じ、いやそれ以上に品質の良いものが作れるのさ。だから、『フルノーゼム』は破棄された。それが二百年前のことだ」

シンが返答します。

「……二百年も経ったから、畑など無くなり、ただの草原になってしまったのか」

「一級土壌地区だから、勝手に大草原ができたわけだな。農民たちはすぐさま国に呼ばれ、工場での働き手になったから、カカシのことなんて忘れてしまったんだろうな」

「でもあのカカシは、今でも待ってるんだよ！ 自分を作ってくれた主人を！」

アトーネは自分がここで何をしても無駄だと知りながら、それでも何かしなくてはならないという気持ちになりました。だって、それはあんまりだと思ったから。

でも、オーナーは薄く笑って、

「確かに嬢ちゃん、それはあっている。あいつはだから周囲に人が近づくのを嫌う、そうやって今まで暮らしてきたんだろうな。でもこの街のやつらはそうじゃないと言っている。二百年もの年月を経て、気が狂っちゃったんじゃないかってな」

と残酷に告げました。

「そんな、だって、だって、あのカカシは……」

「それに周りには畑なんて無い、嬢ちゃんも見たはずだ」

アトーネが何も言い返せないでいると、横からシンが言いました。

「……あいつは周囲の環境が分からないのさ。だって目が見えないんだから。オーナー、だからあいつはまだ畑があると思っているんだ」

オーナーは首を傾げました。アトーネにもよく意味が分かりませんでした。

「目が見えない？ おいおい、冗談はよせよ、その嬢ちゃんを元気づけるためのはったりか？」

オーナーはせせら笑いましたが、シンは冷静に答えました。

「……嘘じゃない。オーナーはあのカカシに会ったことがあるんですよね？」

オーナーはいきなりの問いに目を白黒させました。

「勿論だ。それがなにか？」

「……分からないか？ ……あいつ、麦藁帽子を被っていたらう。それもかなり深く」

オーナーと、アトーネもはっとしました。

麦藁帽子を目深に被っていて、表情すら分からなかったことを思い出したからです。

「じゃあ、あいつは本当に主人が来るのを信じているのか？」

「……そういうことになる」

その言葉を聞いて、突然オーナーは愕然とした表情になり、俯いてしまいました。

「じゃあ、あいつは気なんか狂ってなかったのか……なんてことだ、なんという……」

オーナーのあまりの落ち込みように、アトーネは心配になって尋ねました。

「ど、どうしたんですか、そんなに落ち込んで、まさか、あのカカシに何かひどいことをし——」

アトーネの言葉は途中でシンの右手によって、遮られてしまいました。

「……アトーネ、待て」

「な、なに？ だって、もしかしたら」

シンは無言でオーナーを見ていました。

オーナーは顔を上げ、

「明日、レジャー施設の開発として工事が開始されるんだ……そんな、こんなこと……」

それだけ言ってまた下を向いてしまいました。

アトーネはいやな予感がして、それでも逃げてはいけないと思いながらも、シンの腕を掴みました。

シンは一瞬怪訝そうな顔をしてわたしを見た後、オーナーに向き直り言いました。

「……それが『フルノーゼム』なんですね」

「ああ」

オーナーは辛そうに顔を上げて答えました。

「で、でも、オーナーさんがそんなにがっかりするようなことじゃ」

「工事の計画案を提出したのは俺なんだ。この街に泊まりに来る旅人たちに何か娯楽施設を作らなければと思ってな……それで、あのやかましいカカシのいる『フルノーゼム』を推したんだ。俺の所為だ……」

「で、でも、まだ工事はやめられるんじゃ」

「……明日からならまだ間に合うんじゃないか？」

シンもアトーネの横で言いました。

「いや、日が沈む前に出ると言っていたから、もうとっくに出発しただろう。もう遅い……もう遅いんだ」

「まさか、さっき門のところにいた人たちが……？」

アトーネとシンはさっき門のところで、すれ違った人たちのことを思い出しました。今からでは、到底間に合わない、という絶望感が二人の胸を満たしていきました。

オーナーは唇を震わせて言います。

「それに、それに……街のみんなもレジャー施設の完成を今か今かと待っているんだ。いまさら、止めるなんて……」

そして、それだけ言うと、黙ったまま下を見つめていました。自分の犯した罪の重さに、頭が耐えられなくなってしまったかのようでした。

シンはアトーネの手を引くと、

「……行こう、もう僕たちの目的は果たした」

「で、でも」

ぐいぐいとアトーネを引っ張っていきました。

不意にオーナーの声が聞こえました。

「あ、あんたたち！」

悲痛な叫びは、空気を震わせてアトーネとシンの元へと届きました。

さっきまで虚ろだったオーナーの目には、何かはっきりとした意思が見えました。それはとても黒く、焦りと不安が無秩序に混ざり合った色でした。

シンが振り返って言いました。

「……なんですか、もうあなたに用は」

「いや、たいしたことじゃないんだが、このことは街のみんなには黙っといてもらえるか？ お、お願いだ！ あのカカシが居る場所をわざわざ選んだなんてこと、みんなに知れたら、なんて言われるか。分かったか？ 絶対に言うなよ！」

最後の方はもう懇願ではなく命令になっていました。

シンは無言できびすを返しました。

「お、おい！」

オーナーは慌てて怒鳴りました。

「……分かっています、情報をくれたお礼に僕は何も言いません」

「そうかそうか」

オーナーはにこやかな、晴れ晴れとした笑顔になりましたが、

「……僕は、言いませんよ。僕はね」

とシンがアトネをちらりと見てそう言ったのを見て、急にうなだれてカウンターの椅子に凭れ掛かってしまい、暫く身動き一つしませんでした。

「え？ 犯罪の無い町？」

「ああ、さっきも言ったがその町には犯罪が無い、スピード違反も窃盗も、まして殺人なんてものは無いんだそうだ。夢見たいな話だろ？ この国では近年、そういった物騒な事件が増加してきて困っているんだ。しかしその町だけは犯罪はゼロ！ 素晴らしいことだよ。毎年その町に移住を希望するものが何万人と現れる。でも、そんなに大勢の人が毎年毎年、移住したら町が人で溢れかえってしまう。そう考えた政府は移住許可試験というものを設けて、その厳しい試験に合格した百人だけがその町に移住を許可される。別にまた元いた町に帰ってくることはいつでもできるんだが、まだ誰一人としてその町からは帰ってきていないんだ。それだけ住みよい、いい町ってことだな。うんうん。俺も今年こそは合格して、あの町に行ってみたいもんだよ」

「ひとつ質問なんですけど、その町には試験に合格しないと中には入れないんですか？」

「いや、さっきも言ったが、試験はあくまで移住希望者のみだ。だから、君たちのように観光目当てなら中に入れると思う。わたしはまだ入ったことが無いんだがね」

「……入ったことが無いって、何故ですか？ 試験がいらぬなら簡単に入れるじゃないですか」

「ふふっ、なかなか賢い子だ。でもこれは法律で決まっているんだ、一般市民はあの町に許可無く入ること禁ずる、とね」

「なんで？ 観光目当てでも？ あれ、でもわたしたちは入れるの？」

「旅人なら良い、と法律で決まっているんだ。ただ、まだ誰一人としてあの町に旅人が入っていくのを見たことがない……なんで俺が、その入ったこともない町についてこんなに詳しいかって？ まあ、正直に言おう。今言ったことの殆どは推測だよ、でも、恐らく確かだところにいるみんなはそう信じてる。そして、その希望を胸に、試験合格を目指して日々を過ごしている。はは、バカな妄想だと思ってくれていい、でも、それは同時にみんなの生きる糧となっているんだ。試験に合格すれば、それはもう天国にいるような素敵な人生が待っているんだろう、と思って頑張れる。失敗しても、次の年また頑張ろう、絶対に諦めないぞ、という、なんていうか……」

「……チャレンジ精神、ですか？」

「そう、チャレンジ精神！ それが養えるんだ。つまりどっちに転んでも俺たちにとっては良いんだ。まったくこの国の政府は、聡明な人間にでも恵まれているのかな？」

「あの、ずっと気になっていたんだけど、その町の名前ってなんなんですか？」

「ああ、名前かい？ 名前はまだ無いんだ。ただ、俺たちは『レブン』と呼んでいる」

「……『レブン』？」

「ああ、『レブン』さ。古いこの国の言葉で、理想の場所、光ある場所、という意味だ」

「へえ……良い名前ですね」

「ありがとう、それじゃ、俺はこの辺で失礼するよ。試験までもう余り時間が無いからな、あと二日しかないんだ」

「あ、が、がんばってください」

「ああ、あんたらは先に『レブン』に行つてな。後から必ず行くからよ」

町の入り口のところに二人のフェキニアン（注・異星人）がいた。一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていた。

白いドレスの少女が、

「案外あっさり入れたね、シン」

シンと呼ばれた黒い少年が答える。

「……そうだな。でもさっきの町とどこも変わりが無いみたいだけど。アトーネ、何か聞いているかい？」

シンの質問に、アトーネは疑問符を頭の上に浮かべた。

二人はまず、宿を探した。もう日も暮れかけていたし、さっきの町まで戻るのも面倒だから、今日はこの町に泊まろうとシンが提案したのだ。

通りの両脇に生えている広葉樹が、風でさわさわと揺れていた。その通りを少し歩くと、二人はある異変に気づき始めた。

日が暮れるといってもまだ辺りは明るいのに、誰一人として出歩いていないのであった。たまに見かける家を見ても、カーテンが閉まっていて、中を窺うことができなかった。

アトーネとシンは昔に訪れた、死んでしまった町のことを思い出し、少し気分が悪くなった。早く宿を見つけようと思っていると、広場のようなところに出た。シンがその広場の隅のほうにある、地図が描かれている看板を見つけ、宿の位置が分かった。

この町の構造は先程までいた町とは少し違い、中央に、今二人がいる円形の広場、北側には巨大な建造物の並ぶ工業地帯、東側にはこの国を縦に流れる『ヴォルス川』の支流が流れる耕作地帯、西側は商店などが立ち並び、ついさっき入ってきた門のある南側にもいくつかの商店や民家があった。

すべて、広場から延びる幅の広い道と繋がっていた。

北に工業地帯があるのはさっきいた町と一緒に、この国では春になると南から強い風が吹くために、北にあるのだと、二人は教えてもらっていた。

宿はその広場から西に少し行ったところにあった。

少し太陽が沈みかけた頃、ようやく宿に着くことができた。その間、やはり、誰一人として町の人を見かけなかった。

宿に入ったときにも、二人はとても奇妙な体験をした。

なんと宿代がタダだと言うのである。二人は何度も確認をとって、それでもタダだと言われて、なんだか不思議な気持ちで一泊したのだった。

その晩アトーネはなかなか眠れず、シンの部屋に行った。

コンコンと二回、ドアをノックすると中からシンが出てきた。

「ごめん、少し話があるんだけど」

「……この町のことかい？」

「うん」

アトーネが頷くと、シンは部屋の中に入れた。

二人で、窓から外の様子を眺める。

「……確かにこの町は変だ」

最初に口を開いたのはシンだった。

「そうだよ、誰も外を歩いていないし、それに宿代がタダなんて。こんなの初めてだよ」

「……道で誰とも会わなかったのは、たまたまかもしれない。でも、宿代がタダというのは偶然なはずがない」

「これって、犯罪が無いのと何か関係があるのかな」

アトーネは首を捻って考えていた。

「……たぶん。でも今はまだ分からない。明日、街をもう少し歩き回って、それでも誰にも会わなかったら仕方がないからこの町を出よう」

シンはそう提案すると控えめな欠伸をして眼を擦っていました。アトーネはもうこれ以上シンの部屋にいると迷惑だと思って、自室に戻ると言った。

シンはひとつ頷くと、そのままスイッチが切れたようにベッドに横になってしまった。

アトーネはシンの邪魔をしないように、静かにシンの部屋を後にした。

部屋に戻った後もアトーネはなかなか眠ることができず、窓の外を眺めていた。

夜も遅かったけれど、明かりがついている民家が数件あった。

やっぱり、人が住んでいるんだと、アトーネは思った。

アトーネはそこまで考えて、明日に備えて眠ることにした。

翌朝、朝食をとって宿を後にした。

二人は出るときに念のため料金について聞いたが、だからタダだと言っているだろう、と店主は呆れたようにそう言ったのだ。そして、その後、殺されたら敵わんからなど、彼は呟いた。

「……殺すって誰がですか？」

シンが尋ねると、

「あんたたち旅の人かい？」

と逆に二人は質問された。

シンが肯くと、店の主人はしまった、というような顔をしてから、今日一日この町にいればいやでも分かる、とよく分からないことを言った。

そうして、アトーネとシンはよく分からないまま、朝もやの晴れた町へと足を踏み出したのだ

った。

通りにはやはり人はいなかった。

しかし、通りに面したお店は開いてるところも何店かあった。

ふとアトーネが横を見ると果物屋さんがあった。

仲のよさそうな中年のおじさんとおばさんが、果物を棚に並べていた。

アトーネがシンに、おいしそうだね、と言うとシンは、この店もタダだったりして、とおどけて言った。

アトーネは、

「そうだったらいいなあ、ねえ、寄ってもいい？」

と尋ねました。しかしシンは、

「……さっき朝食を摂ったのにかい？ ……だからアトーネはふと——」

とそこまで言ったシンの肩を、アトーネはバシンと勢いよく叩いた。

とその時、信じられないことに前方から人がやって来た。他の町なら普通のことで何故か、ここでは異様に感じられた。

歩いて来る人は黒いコートを着た男性だった。通りに歩いているのはその人とアトーネとシンだけだった。

アトーネはその人が横を通り過ぎるまで、身動きができなかった。それは、その人がまるで死にそうなくらい虚ろな目をしていたからだった。

アトーネはシンを見たが、首を横に振ってよく分からないと呟いた。

さっきの男の人は、二人がついさっき通り過ぎた果物屋の中に入っていった。ただおなかが減っていただけ、なのかなと、アトーネはシンに聞いたが、シンは黙ったままだった。

仕方がないのでアトーネもシンも無言のまま歩き出した。

その沈黙を破ったのは女性の大きな悲鳴だった。

「ちょっと、あんた何するのよ！ それは売り物よ！ ちょっと、あなた来て！」

その後何発かの発砲音と、男の人の怒鳴り声が聞こえた。それがさっきの男の人のものなのか、それとも店の主人のものなのか、アトーネには分からなかった。

しかし、約二秒後、その答えが分かる。

店の前にどさっという音と共に、さっき二人の前から歩いてきた男が放り出された。しかも血まみれで。黒いコートはさらにどす黒く鮮血で染め上げられ、虚ろだった目は、完全に虚空を見つめているだけの、無機質な物体になってしまっていた。

その人の見上げた視線の先には白い十字架のような雲がプカプカと浮いていた。

数分後、警察のような服を着た人が一人、清掃員のような格好をした人が数十人、事件の起こった店にやってきた。

救急車の類は一切現れなかった。

アトーネはわけが分からなくなった。この町で犯罪は起きないはずなのにと、アトーネもシン

も思った。

さっきの警察のような服を着た人が、二人の目の前にやって来た。

「君たちは旅人かい？」

と聞かれ、二人は正直に答えた。

彼の後ろでは、清掃員たちがせっせと血で汚れた地面を綺麗にしていた。

その人の名前は、レジスといった。軽い自己紹介を互いにした後、シンが聞いた。

「この町では犯罪が起きないのではないんですか？」

すると、レジスが答えた。

「はい、そうですよ。この町では犯罪は起こりません」

そして、アトーネとシンは少し話があるからと、言われて小さな事務所のようなところまで案内された。

事務所の中には小さなテーブルが一つと、木でできた椅子が四つ置かれていた。

事情聴取でもされるのかとっていると、実際はそうではなかった。

「さて、何から話したらいいか……旅人さんか……」

レジスは一つ息を吐いた。

彼はどうしたらいいかわからないという様子だった。アトーネも何から聞いていいのかわからなかった。

この町では犯罪は起きないはずなのに殺人が起きたこと。

誰も外を歩いていないこと。

宿の人が言っていた、殺されたら敵わなん、という言葉。

果物屋の人たちが何の罰も受けなかったこと。

最初に口を開いたのはシンだった。

「……まず、何故この町では犯罪が起きないのに、どうして犯罪が起きてしまったのか教えてください」

レジスさんは頷いて両肘をテーブルにつき、指を絡めて、話し始めた。

「旅人さんが聞いたのは、この町が『犯罪の無い町』である、だと思います。それは正解です、現に犯罪は一度も起こったことはありません」

「……じゃあ、さっきのはなんですか？ あれは殺人で、れっきとした犯罪ですよ」

「いえ、犯罪ではありません」

「それってどういう意味？」 「……それってどういう意味ですか？」

アトーネとシンはほぼ同時に聞いた。

「犯罪が無いって言うのはね、犯罪が起きないって意味ではないんだ……じゃあ、何かって？ それはね……犯罪が法律に無い、ということだよ」

確かにレジスはそう言った。

法律で犯罪が決まっていない。つまり、殺人は起きてもそれ自体は犯罪ではない、とそう意味だったのである。

「だから、それゆえに犯罪が起きないんだけどね」

レジスは自嘲気味に笑って言った。

「おかしな話だろう？ 犯罪というものの自体がないんだ。いわゆる無法地帯だよ、ここは。町で人に会ったかい？」

アトーネは首を横に振った。そして、それは昨日からずっと気になっていたことです、と告げた。

「……つまり、いつ誰に殺されても文句を言えないこの町では、出歩くことさえ危険ということですか？」

「ええ。だから大体のお店はしまっているでしょう。先ほどの果物屋は開いていましたが……いつもなら店員の方が殺されるケースが多い中で、客が殺されるというのは珍しいですよ」

「あ、あの、お店の代金がタダなのもそのためなんですか？」

「まあ、そういう店もたまにありますね。代金が高いとか何とか言われて、殺されたら堪りませんからね」

段々謎が解けてきたが、ここで新たな謎が浮上してきた。それは二人とも同じことだったらしく、シンが代表して聞いた。

「……レジスさん、では何故法律に犯罪が無いんですか？ 何か目的があつてのことなのですか？」

レジスは待っていました、とばかりに説明を始めた。

「目的か、もしかしたらあるのかもしれない。ただ私にもまだ、よく分からないんだ。聞いた話なんだが、昔、二十年くらい前になるらしいんだけど、アバイドという異星人がこの星に来たんです。そして、この国へ来て、ある思想を王様に告げたんだそうです」

「……その思想って言うのが」

「そう、この法律。なんでもアバイドは、犯罪というのは人間の心の闇の部分が原因だ、それに、法律に犯罪など作らなくても、心の清らかな人間が住む町ならおのずと犯罪は消滅していく、とかなんとか言って法律から犯罪の項目を消去しなさい、と王に言ったそうなんです。でも王だってそんな胡散臭い話信じられない。でも大臣がこう言ったんだ。ひとつ町を作って実験してみたいかがですか、ってね。それでできたのがこの町さ。確か『レブン』と呼ばれていたな」

アトーネにはなんだか話が大きすぎる気がした。異性人の話をまともに受けて、町を実験場にして、そして、そこを理想郷と信じて毎日毎日、試験に向けて頑張っている人たちがいる。

「……『レブン』というのはこの国の古い言葉で、理想の場所、という意味があると聞きました」

「ええ、そうですね。まあ、実際はこんな町で、どこが理想の町なんですか？」

アトーネは辛そうなレジスに、最後の質問をした。

「あ、あの、どうして、この町の人たちは外に逃げないんですか？ 外も出歩けないような町にいたって何も……」

「出られないからです。法律で決まっているんです、ですから外に逃げることはもちろん、一歩も外に出ることはできないのです」

レジスはひとつ溜息を吐いて、続けた。

「それに、まだ実験は続いています。二十年経った今でもね。アバイドは言いました、期間は最低でも三十年。それ以下では正確な実験結果は出ないと前の星で証明済みだ、と」

そこまで言うと、話し終わったのか、レジスは俯いたまま動かなくなった。

「……話が終わったのなら、僕たちはこれで」

とシンが言った時、レジスは急に顔を上げた。とても弱々しい顔だった。

「ま、待ってくれ、最後に一つ聞いてもいいかな？ ……その、こんな法律、間違っているよな？ 私が間違っているんじゃないよな？ この法律に反対することは禁止する、と法律で決まっているんだ、でも、私が感じているこの理不尽さは、正しいのか？」

アトーネはなんと返していいのか分からずに、ただ黙っていた。

「なあ、君たち、王様のところへ行ってこの法律をやめさせてくれ！ あのアバイドのように王様をそそのかして、この町を救ってくれないか？」

しかし、シンは冷徹に言いました。

「……いやです」

「な、何故ですか？ お願いだ！」

レジスさんは、闇に満たされた谷の底へ落ちたかのような顔でシンを見た。

「……それはできません。何故ならあなたの考えは間違っているからです。この法律はとても素晴らしいものです、こんなに素敵なものを消してしまうのはもったいないことだと思います」

「そんな……私の、私の考えが間違っているのか？ そ、んな……」

レジスは今度こそ本当に身動き一つとれず、テーブルの上に突っ伏してしまった。

「……行こう、アトーネ」

そう言って、シンはアトーネの腕を引っ張って行った。

後にはかすかな泣き声だけが残っていた。

「ねえ、シン、なんであんな嘘ついたの？」

アトーネは事務所から出て、この町を出ると、急に言い出したシンにそう言った。

「……法律に反対するのは禁止、つまり反対すれば犯罪ってことだ。でも犯罪は無い……まったく矛盾だらけの国だな」

呆れてため息をつくシンに、アトーネはもう一回聞いた。

「ねえ、なんであんな嘘ついたの？」

シンはアトーネを見たが、何も言わなかった。

「ねえ、シン——」

「……分からないか？」

「な、なにが？」

「……嘘のわけさ」

「嘘のわけ？ 分からないから、聞いているんだよ？」

シンは遠くに見える町の入り口に、目をやると口を開いた。

「……あの人はあのままだつたらまずいことになっていた、と思う。法律に反対したらいけないからだ。だから僕が彼の考えを否定して、嘘をついたってわけさ」

「でも、それじゃレジスさんが可哀相だよ。あの人は間違っていないのに……」

アトーネはほとんど泣き出しそうだった。

「……でも、こうすることが彼の為なんだ。分かってくれ、アトーネ」

「そんなの、分からないよ……」

アトーネはその時、ふと、ある人のことを思い出した。

それは昨日町で会った、『レブン』について教えてくれた男の人のことだった。

「シン、あの男の人はどうなるのかな？ ほら、この町について教えてくれた人だよ！ どうしよう、もしあの人が試験に合格でもしたら……この町に一度でも入ったら、一生出られないのに……」

アトーネの言葉は大気に霧散し、シンは足を一步、前に踏み出した。

「……僕らにできることは祈ることだけだ。彼が試験に合格しないこと。もし合格しても、町で後十年生き延びること。もしくはこの法律が早くなくなることをね」

シンはそう言うと歩き出した

アトーネは手を体の前で組んで軽く目を閉じた。

祈ることしかできないのなら、精一杯祈ろう、とそうアトーネは思った。

数秒後、静かに目を開けると、入り口の手前まで行ってしまったシンを見つけて、アトーネは駆け出した。

ある星のホイリオという街のカフェに二人のフェキニアン（注・異星人）がいました。一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪が輝いていました。

黒い少年がメニューを捲りながら、

「……うーん、どれも美味しそうで迷うな……アトーネ、君は決まったかい？」

アトーネと呼ばれた白い少女が答えます。

「うーん、もう少し。それより、シンがメニューを見ながら話しかけてくるなんて初めてじゃない？」

シンと呼ばれた黒ずくめの少年にはもうその声は聞こえていないのか、真剣にメニューを吟味しています。

ふと、後ろから声かけられました。

「あ、あの、旅の方ですよね？」

「……そうですけれど」

シンが最初に答えました。アトーネも振り返って見ると、そこには眼鏡をかけた気弱そうな青年が立っていました。年はアトーネやシンと同じくらいです。

「……なにか用ですか？」

「あ、あの、僕には悩みがあるんですけど、旅の方ならいいアドバイスをもらえるかな、と思って……」

最後の方は尻すぼみで、アトーネにも何と言っているのかよく分かりませんでした。

その蚊の消え入りそうな声の青年が続けます。

「実は僕、今日ある女性に告白をしようと思っているのです。なので、どうすれば一番上手くいくかを旅人さんの視点で考えていただけたら嬉しいかな、なんて……」

「まあ、座ってよ」

そう言うとアトーネは椅子をひとつ、彼の前に押し出しました。

彼はありがとう、と一言言って椅子に腰を下ろしました。

「一番上手くいく方法って言うのが難しいよね、シン？」

「……」

シンは僕に聞くなよと言いたげな顔でアトーネを見ました。一瞬沈黙が降り、青年が口を開きました。

「僕はケリンといいます。あそこに見える図書館で働いています。結構多くの人と接する機会があるのですが、彼女は、セリーヌは違ったのです」

青年が続けます。

「なんていうんですかね、ああいうのって。運命、とでも言うんでしょうか」

「なんだか素敵ね。それでどういう風に告白したいの？」

「えっと……」

青年は口ごもってしまい、それきり、ううんとか、ああとかしか言えないでいました。

ふとシンが、

「……自分の気持ちをありのままに伝えるのが良いんじゃないでしょうか。昔何かの本で読んだことがあります」

「ああ、アラモードさんの著書ですよ……確かに、それが一番良いのかもしれませんが。自分の気持ちを、ありのままに、か……」

青年は何か納得したような顔をして空を仰ぎました。

しかし、すぐに顔を曇らせてこう言いました。

「でも、なぜかみんな僕に反対するんですよ。そんな考えはおかしいって。ついには、誰も相談にすら乗ってくれなくれました。僕はどこかおかしいのでしょうか？」

「そんなことないよ。そういう気持ちってすごく大切だと思うの」

アトーネがそう言うと、青年はぱっと明るい顔になりました。

「じゃあ、早速そのセリーヌさんのところへ行って来なよ。きっと上手くいくから」

「はい。なんだか自信が出てきました。お二人とも、ありがとうございました」

青年は満面の笑みでアトーネとシンを後にして、去って行きました。

その後ろ姿が見えなくなると、

「……なんだったんだろうな」

とシンが言いました。

「さあ？ でもこれがあの人の為になったならいいんじゃない？」

シンはさも疲れたようにふうっと息を吐きました。

それからしばらくして二人とも注文するものが決まり、ウェイトレスを呼びました。

妙齢の綺麗なウェイトレスが二人の席へ来ました。

「先程の男の人、何か旅人さんに失礼なことを言いませんでしたか？」

ウェイトレスは仕事をする前にいきなり二人にそんな質問をしました。

「別に言ってないですよ」

「……どういうことですか？」

勘の良いシンはすかさずウェイトレスに聞き返しました。

「それが、あの人はどうも頭がおかしくて」

「頭がおかしい？」 「……頭がおかしい？」

二人は同じ言葉を言いましたが、シンのほうが三秒ほど遅れて言い終わりました。

ウェイトレスは頷いて、

「はい。だって、あの人の考えなんて理解できないんです。本当に頭が狂っていますよ」

「どうしてそんなこと言うんですか？ 彼の考えは間違っていないよ」

「……“人を愛すること”は世間一般的に見て大事なことです」

シンがそう言うと、ウェイトレスは怪訝な顔になりました。何を言っているのか分からない

といった顔です。

「あの男の人は“愛”を求めているんじゃない。 “死”を求めているんです。彼は自分を殺してくれる人を探しているんですよ」

ウェイトレスはそう言い切ると、目にたくさん涙を溜めていました。

「……それはつまり、告白というのは……自分を殺してくれ、ということですか？」

「はい。彼はこの人になら殺されてもいい、と思える人を探していたんです……私なんか彼の瞳には映っていなかったんです」

ウェイトレスはどうとう泣く寸前まできました。アトーネは何と言っていいか分からず、ただ呆然と会話を聞いています。

ウェイトレスは続けます。

「私は彼の意見に反対しました。彼に死んで欲しくなかった……彼に賛成できないのは身を切るような思いでした。でも、彼の考えを認めてしまったら、彼は私の目の前から、今度は本当にいなくなってしまうんです。そんなの、私には耐えられません……彼は最期、自分が死ぬときは、銃で撃たれて死にたいと、笑顔で話してくれました……もちろん私は反対しました。少しでも彼に生きていてもらいたくて、私はただただ彼を否定することしかできませんでした……でも、反対すればするほど彼は私のことを嫌いになり、ついには私と話をすることさえしなくなりました……だからこうやって、彼と話した人にどんなことを話したのかと、聞いているんです……でも、もう、耐えられません……」

アトーネも、シンも黙ってウェイトレスの話を聞いていました。

ただ、黙って聞いていました。

遠くで銃声のような音が聞こえて、やがて静かになりました。

「どうだい兄ちゃん。一個買っていかないか？」

大通りの露店商の前に二人のフェキニアン（注・異星人）がいました。一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪と、首から下がっている金の歯車を模したペンダントが輝いていました。

黒い少年が店の主人に返します。

「……すみません。僕たち、あまりお金がなくて……それにその商品の使い道もないので」

白い少女はちょっと悲しそうに、

「そうだよ、おじさん。お金持ちだったらわたしたち、あんなに安っぽいホテルなんかに泊まらないよ……ねえ、シン？」

シンと呼ばれた少年が、女の子に向かって焦って言いました。

「……ちょっとアトーネ、そういうことはあんまり言わないでよ。ホテルに失礼だろ？」

アトーネと呼ばれた白い少女がむすっとして言います。

「もう、シン。すぐわたしのこと怒るんだからっ。ホント怒るからね」

二人の会話をじっと見ていた店の主人がようやく口を開きました。

「わかった。だったら一個やるよ」

「……でも、悪いですよ」

「金、ないんだろ？」

店の主人はニコリと笑って、アトーネとシンに一つずつ商品をタダであげました。

「……じゃあ、僕たちはこれで。ホテルに帰るところなので」

「ああ。それ、大事に使ってくれよ」

二人はお礼を言って露店商を後にして、ホテルのある方角に向かって歩き出しました。進行方向と反対側に太陽が沈みかけていて、二人の影は細長く、自分たちの目の前を闊歩していました。

程なくしてホテルのある貧困街へとやって来ました。

アトーネはさっき貰った商品を眺めました。

「シン、なんでこんなのが街で沢山売られているんだろうね？」

「……さあ。時代ごとに流行の波って言うのがあるんだよ。きっと」

「ふーん」

スラムに住む子供達がアトーネの持っているものを見て、もの欲しそうな目で見っていました。それに気づいたアトーネは子供たちに向かって、

「いる？」

と聞きました。子供たちは目を輝かせてこくと頷きました。

「はい、一個しかないからって喧嘩しないでね」

アトーネが子供たちにそれを手渡すと、彼らは満面の笑みで家の方へと走っていきました。

「シンもあげれば良かったのに」

アトーネが少し怒った口調でシンに言いました。

「……おじさんに大事にしろって言われたらどう？アトーネこそ、あんまり軽々と貰ったものをあげない方がいいよ」

ホテルのエントランスは沢山の人で賑わっていました。

ホテルの中に入った時に、シンも貰った商品を取り出しました。スケルトンブルーの色をしたそれは、蛍光灯にかざすとキラキラ輝きました。

ホテルのオーナーがそれに気づき、急にそわそわし始めました。他に泊まっているお客たちも落ち着かない様子です。

「シ、シンさん。それをどこで手に入れたのですか？」

オーナーがシンに尋ねました。

「……街の露店で入手しました。でも、この商品が……いえ、このボビンがそれほどの価値があるとは思えないんですが……」

シンは自分の指で摘んでいる青いボビンを見て言いました。しかし、シンがそう言うと、エントランスにいた他の宿泊客たちがざわめき出しました。一人の中年の女性がキーキー喚いて言いました。

「ちよっとあなた！　いくらフェキニアンだからって、言っているいいことと悪いことがありますわよ！　ボビンの価値が見出せないなんて口が裂けても言わないで！」

一人の博識そうな初老の男性が、前に進み出てシンとアトーネに言いました。

「旅の方、確かに貴方の今言った言葉は我々に対する侮辱です。かの哲学者アラモードはこう言いました、『ボビンを笑う者はボビンに泣く。ボビンに泣く者はボビンを得る』と。貴方は今日のボビン社会の何を知っていると言うのです？　ボビンを持っているからと言っていい気になってはいけませんよ」

他のお客たちも、そうだそうだ！　と老人のバックアップに徹しました。

「ねえ、シン。なんかまずいことになってる？」

「……かもね。ここは一端、謝っておこう」

シンも一歩前に進み出て、エントランスにいるみんなに聞こえるように言いました。

「……えっと、みなさん、すみませんでした。僕の軽はずみな発言がみなさんの気分を大いに害してしまったことを心からお詫びしたいと思います。なので、今からこのボビンを誰かに差し上げようと思います」

シンがそう言うと、さっきまで殺気立っていたエントランスが急に静まり返りました。老人はゴクリと生唾を飲み込んで言いました。

「た、旅人さん……えっと、その、そのボビンは、だ、誰にあげるおつもりで？」

シンはホテル内を見回しました。みんな一生懸命に祈っていました。どうか自分でありませよ

うに、と。またある人は自分がさっき言ってしまった罵倒の所為で、ボビンが貰えないだろうと絶望にくれる人もいました。

シンはたっぷり時間をかけた後にこう言いました。

「……では、今から僕が天井に向かって投げますので、ボビンを一番先に手に入れた人に差し上げます！」

シンはそう叫ぶと、ボビンを天井に向かって思いっきり投げ上げました。人々は血走った目でボビンの行方を追いました。人々は押し合いへし合いしながらもつれ合っていました。

「……行こう、アトーネ。違うホテルに泊まろう」

シンはそう言うとアトーネの小さな手を取ってホテルの外に出ました。

外はもうすっかり日が暮れて街灯がついていました。二人は他のホテルを捜すために大通りの方へと戻りました。

歩いている途中、一人の青年が木箱の上に腰掛けてリングをかじっていました。

「旅の人？　ここらじゃ見ない顔だね」

青年はそう言ってリングにかぶりつきました。

「そうだよ。君もボビン好き？」

「……こら、アトーネ。何で君はいちいち物事に首を突っ込むんだい？」

「いーじゃん、いーじゃん」

「……はあ、僕は嫌なんだけど、なんで分かってくれないんだろう……」

シンの呟きはアトーネには聞こえていないらしく、青年とすでに話し始めていました。

「ボビンか、確かにこの国、いや、この星の人間なら誰しものが欲しがらるだろうな……まったく馬鹿げてる」

「君は欲しがらないの？」

「当たり前だ。あんなもの、なんの役に立つって言うんだ？　旅の人なら分かるだろう？　なあ、教えてくれよ！　他にもこんな風に腐ってしまった星があったか？　こんなにも流行に流されやすい星があったか？」

シンもアトーネも何も言えませんでした。やがてシンが言いました。

「……僕たちは確かに色々な星をめぐるしました。でも、その中で一つでも腐った星と呼べるものはありませんでした。全部素晴らしいです。もちろんこの星も」

青年はシンに向かって激怒して言いました。

「この星が腐ってないって？　いいや腐ってるね！」

「ええっと、いつからこんなふうにボビンがすごいことになっちゃったの？　知りたいなー！」

アトーネが青年の気をなだめるように尋ねました。青年はどかっと木箱に腰を下ろして話し始めました。

「俺の生まれるずっと前さ。昔、この国の国王のところへ一人のフェキニアンがやってきたんだ。確か名前はアバイド。もう五十年くらい前の話だけだな」

「五十年も前からボビンブームなの！？」

アトーネは驚いて、思わず聞き返しました。

「ああ、そうだ。そしてアバイドは国王に、これは大変貴重な代物ですって言ってボビンを渡した。もちろどこにでもありそうなボビンだ。でもアバイドは、それがやつの星では権威の象徴だったって言ったんだ。それで国王は真に受けちゃってさ。世界中からありとあらゆるボビンを買収し出したんだ……でも半年ぐらい過ぎた頃に他の列強な国々が気づき始めたのさ」  
「……」

シンは無言で話を聞いていました。青年が続けます。

「それからは国同士のボビンをめぐる競い合いさ。戦争も何度か起きたらしい。俺が生まれてからはまだ一度もこの国は戦争をしてないから、実感湧かないけど、北の国では戦争が絶えない……ボビン所有率が権威の象徴、偉さなんて笑っちゃうよな？ でも、今、世界はボビンの上で廻ってる……悔しいけどそれが現実で、俺たち子供が立ち向かうにはでかすぎたんだ。世界ってやつはな……」

「なんで誰も言わないんだろう？ ボビンが本当はそれほどの価値がないってこと」

アトーネが青年に聞きました。青年は微笑して言いました。

「気づいてないのさ。回りに流されているんだ。みんな欲しがっているから、自分も欲しがらなきゃって思うんだろうな……」

今度はシンが、青年に尋ねます。

「……じゃあ、何で君はボビンに興味がないんだい？」

「俺の両親がフェキニアンだからさ。オレの両親はこの星のやつらに殺されたんだ」

「殺された？ まさか、ボビンなんて大っ嫌いだー！ ってみんなの前で叫んじゃったとか？」

アトーネが青年に尋ねました。青年はそれならいいんだけどな、と言って話し始めました。

「俺の両親はボビンを沢山持っていたから殺された。国の役人にな……」

「……つまり、ボビン欲しさに政府が？」

「そうだ。七年前だから……俺が十三の時だ。俺はあの日からボビンを憎むようになった。あんなものがあるから人は狂ってしまった……でも、これがこの星なんだよな？」

「……そうだよ。腐っているとは、僕は思えないけど」

青年は星々が輝く夜空を見上げて呟きました。

「俺はいつかこの星を出ようと思う。たぶんこの星は一生このままだから、俺はもっといい星を見つけに行くよ」

「頑張ってね。応援してる」

アトーネはニコリと笑って青年にそう言った。

「……アトーネ、そろそろホテルを捜しに行かないと、野宿なんて嫌だろう？」

シンはそう言ってすたすと大通りの方と歩いていってしまいました。

「あ、うん。ちょっと待ってよ」

アトーネも急いでシンの後を追いました。その時後ろから青年の声がしました。

「おい、お前ら！」

シンとアトーネは立ち止まって青年を見ました。青年は二人に向かって言います。

「ありがとう。こんなこと今まで誰にも話せなかったから、すっきりしたよ」

そう言って青年はニコリと笑いました。

「じゃあねー！」

アトーネは大きく手を振りました。シンも片手をひらひらと振りました。青年は二人が見えなくなるまで見送っていました。そして、その背中が見えなくなると自分の家へと帰って行きました。空には相変わらず沢山の星が輝いていました。星の輝きに意味はありません。競い合っているわけでもありません。青年の夢見る世界はきっとそのような未来なのでしょう。

青年の走り去る後姿を見ている黒服の男がいました。黒いサングラス越しに青年の背中を見えています。そして、おもむろに携帯電話を取り出してどこかに掛け始めました。

「……はい。こちら、F-16。はい、そうです……しかし、フェキニアンには宇宙法が適用されますので、はい……はい………では、青年の方だけ憲法第五七四条第三項『ボビンに対する暴言・誹謗の禁止』違反の罪で、全隊に射殺命令を………はい、分かりました。では、失礼します」

男は電話を切ると、懐から黒くて重い大型のレボルバー銃を取り出しました。

冷たく、鈍く光るその色は夜の闇に少しだけ似ていました。

「旅人さん。この国には神がいるのです」

街の中心に位置している公園の噴水の前で、一人の男性と二人のフェキニアン（注・異星人）が話をしていました。

一人は黒いジャケットに黒いズボンで、全身黒い十代半ばくらいの少年。

もう一人は少年とは対照的に白い清潔そうなドレスを着ている少女。こちらも歳は十代半ばといったところで、長く伸びる金色の髪と、首から下がっている金の歯車を模したペンダントが輝いていました。

男性は眼鏡の奥の情熱的な瞳で言います。

「本当に素晴らしいのですよ。神は何でも知っています。経済的な戦略や、戦争はもちろんのこと。受験生たちにはテストの予想問題までも教えてくれます」

「へえ、すごいだね、神様って。ねえ、シン？」

白いドレスの少女が言いました。シンと呼ばれた黒い少年は、

「……確かに……その神様って一体何者なんですか？」

男性が答えます。

「何者かは分かっていません。まだ、誰も会ったことがないのです。神のお告げはコンピュータ回線を通してしか知ることができないんです」

「でも、きっとすごい人なんだろうなあ。ね、会ってみたいよね、シン」

白い少女はニヤニヤしながらシンを見ました。

「……無理だよ、アトーネ。この星の人たちが会ったことがないって言うのに、僕たちフェキニアンが会えるはず無いさ」

アトーネと呼ばれた女の子は少し残念そうな顔をしました。男性は角のお店を指差して、シンとアトーネに向かって言いました。

「神のお告げはコンピュータを使えば簡単に知ることができます。あそこのお店は、カフェでありながらコンピュータを使えるので、寄ってみてはいかがでしょう」

「ありがとうございます」「……ありがとうございます」

二人は同じことを言いましたが、シンのほうが二秒ほど遅れて言い終わりました。

「それでは、私はこの辺で帰ります」

男性はそう言うと、夕日の沈む街へと帰っていきました。シンはその背中を見ながら呟きました。

「……神、か」

「会えるかな？」

「……まだそんな事を言ってるのかい？ まあ、どんな人物かは知りたいけど……そうだ、あの店に行ってみよう。コンピュータで神様に聞けばいいんだ」

アトーネは不思議そうに尋ねます。

「何を聞くの？ この国で一番美味しいパフェ店の場所とか？」

シンは微笑して答えます。

「……神様の居場所さ……いや、パフェのことも聞こうかな」

「返事もらえるかな？」

「……さあ、神様も忙しいだろうしね」

落ち着いたクラシック音楽（注・この頃の宇宙の古典音楽。実際のクラシック音楽とは別物）が流れ、シンとアトーネはコンピュータの画面を見ながらパフェを食べていました。

客の数はそれほど多くなく、十数人しかいませんでした。

ポーンと言う軽快な音がしてコンピュータの画面が切り替わりました。

「あ、神様から？」

「……そうみたいだ。えっと何々……」

シンは煌びやかな画面に、黄金色で書かれた文字を読みました。幸い、文字は宇宙共通語で書かれていました。

「……私は首都ゴルジオのセルードと言うビルの最上階にいます、だつてさ。じゃあそこに行けば——」

「待ってシン。まだ何か書いてある」

「……本当だ……あなた方旅の者達なら、特別にお会いしても構いません、つて……」

「神様に会えるってこと？」

「……でも、なんで僕たちがフェキニアンだつて分かったんだろう？」

アトーネは余裕の笑みで答えます。

「きっと神様だからだよ！」

「……うーん」

「どうしたの？」

「……いや、なんでもない。取りあえず行ってみよう。首都ゴルジオへ」

二人は早速お店を出ようとしてました。そして、そのとき重大な事実気づきました。コンピュータを使うだけと言っても、料金を取られたのです。

首都に着くと辺りもうは暗くなってきていました。オレンジ色の空に一つの大きな建造物が聳え立っていました。それが首都ゴルジオのシンボルであるビル、セルードでした。最上階には神がいるのです。

「どうするシン？ もうすぐ日が暮れちゃいそうだけど」

「……いや、早く神様に会おう。明日になって、気が変わったとか言われたら困るからね」

シンはそう言うのとセルードへと近づいて行きました。アトーネはドレスの裾をはためかせなが

らシンの後を追います。

「ねえ、さっきから気になっていたんだけど。どうしてシンはそんなにも神様に会いたがっているの？」

シンは立ち止まってアトーネの方を振り返って言いました。

「……アトーネのおじさんの事を聞くんだ。どこにいますか、ってね。早く会わなくちゃいけないだろう？」

アトーネは目をぱちくりさせながら言いました。

「どうしたの、シン？ 熱でもあるの？ やっぱりホテルに戻ったほうが……」

「……君は僕をバカにしているのかい！？」

シンは怒った口調でアトーネに言いました。それから無言でそそくさとセルードの入り口へと歩いて行ってしまいました。アトーネも謝りながら急いで後を追いました。

セルードの中はいたって普通でした。受付カウンターのような所があり、まずはそこで話を聞くことにしました。

「すいませーん。神様に会いたいですけど」

アトーネは受付嬢につっけんどんにこう言いました。

「ああ、旅の方ですね。先程神様から伝言がありました。もうすぐ旅の者が来るから歓迎してやってくれと」

「……そうですか。でもなんで神様は僕たちがここに来るって事や、僕たちがフェキニアンだって事がわかるんでしょう？」

シンの質問に受付嬢が笑顔で答えます。

「これからお会いするのですから、じっくり聞いてみてはいかがでしょう？」

数分後、エレベーターから降りたアトーネとシンは最上階に来ていました。最上階は足元に点々と街灯が灯るだけの、薄暗く寒い場所でした。

「こちらです」

受付嬢が歩き出しました。二人は後を追います。三人分の足音がやけに大きく聞こえました。数十モーツ（注・この頃の長さの単位。1モーツは約9メートル）進んだ時、目の前に巨大な扉が現れました。黒く重そうな金属でできた扉でした。ギギギ、という音を立てて扉が自動的に開きました。

「中へどうぞ」

受付嬢はそう言うのと去って行きました。取り残されたシンとアトーネは扉の中へと入って行きました。

「うわあ」「……すごい」

二人はほぼ同時に感嘆の言葉を漏らしました。

部屋の内部はなにやら黒く太いチューブや、パイプ、コンピュータの画面があり、その光だけ

がぼうっと、暗闇を照らしていました。天井は暗くて見えないのか、高すぎて見えないのか分かりませんが、とにかくどこが天井なのか分からないくらい広い場所でした。

人の姿は見当たりません。

「神様ー！ 会いに来たよーってあれ？ いないのー？」

アトーネの声は反響して、奇妙な獣の鳴き声のようでした。

「……」

シンは無言で辺りを見回しています。

その時、声が聞こえました。厳かで、どこか人間っぽくない響きでした。

「よく来た。旅の者」

しかし、部屋の中にはアトーネとシン以外の人影を確認できませんでした。

「ここだ。目の前にいる」

二人は目の前を見ました。しかし、人など一人もいません。もちろん、神の姿も。

シンがポツリと呟きました。

「……まさか、神様って……機械なんですか？」

「えっ!？」

一番驚いたのはアトーネでした。二番目は恐らく神様です。

「ほう、よく機械だと解ったな。いかにも私の体は機械仕掛けだ」

「……だから、コンピュータでしか会話をできなかつたんですね」

アトーネは神と普通に会話するシンを、信じられないというような目つきで眺めていました。

「……聞きたいことが山ほどあります。何故あなたが全ての事を予知できるのか。何故僕たちがフェキニアンだと分かったのか」

「そんなものは簡単だ。後者の方から答えよう……決め手は私の居場所を聞いたことだった。この国の者達は皆知っている。私がセルードの最上階にいることぐらいはな」

「……つまり、居場所を聞く、と言う行為で自分からフェキニアンとばらしてしまっていたのですね」

「そういうことだ。だが、これは単なる推理でやっただけのことだ。今までこの国で行ってきた予知は私の能力でやったのだ」

アトーネは一人だけ会話に加われず、つまらなさそうに窓から下を見ていました。暗くてよく分かりませんが、ビルの入り口付近に沢山人がいました。

シンと神様はまだ話しています。

「……僕が聞いたところによると、経済面や戦争面でも活躍なされているとか」

神様はシンの質問に答えます。神々しい音ですが、やはり機械音です。

「左様。私の能力は予知、と言うよりは統計学の究極形態だ。宇宙空間を彷徨う電磁波をキャッチし、それを解読することで他の惑星での出来事を知ることができるのだ」

「……その確率でこの惑星で次に何が起こるか、と言うことが分かるのですか」

「そうだ……時にお前、シンと言ったか。私のことが知りたいわけではあるまい。本当の質問を言ってみろ」

シンは思わず微笑して言いました。

「……すみません、神様。今までの神様の力が本物なのかは試してみただけです……でも、これで信頼が持てました」

神様も苦笑して、

「ふん、神をテストするとは良い度胸だな……では、早くお前の質問を言ってみろ」

「……僕が知りたいのは、実はアトーネの――」

シンの言葉はそこで途切れしました。

建物が揺れていました。地震かと思いましたが、違うようでした。振動はどんどん大きくなり、遂に扉をその振動の発生源が突き破りました。黒く重い扉はあらゆる武器で武装された人間達によって破壊されてしまったのです。

「やめてください！ みなさん！」

先程の受付嬢が国民達を止めようと、必死になって声を上げていました。

国民達は血相を変えて叫びました。

「神はどこだ！？」

「くそっ！ 逃げられたか！？」

「おいっ！ 神はどこだ！」

神様は威厳のこもった電子音で言い放ちました。

「私ならここだ」

国民たちはぼかんと気の抜けた顔になりました。目の前には巨大な機械。まさか、それが今まで崇拝してきた神様だとは誰も、夢にも思わなかったからです。

「どうした、国民たちよ。ここに立ち入ってはいかんと言っただろう」

アトーネはシンのそばに駆け寄ってきました。

「シン、どうしよう？ なんなの、これ？」

「……ああ、アトーネ。いたのかい？」

すかさずアトーネの手刀が飛んできましたが、シンはそれをひらりとかわしました。

国民たちは呻ります。

「どうもこうもあるか！」

「そうだそうだ！」

「神様の言うとおりにしたら会社が倒産したんだ！」

神様は言葉に詰まりました。一人で何かをブツブツ呟いていました。

「……みなさん、落ち着いてください。何があったんですか？」

シンが国民たちに言いましたが、彼らは聞く耳持ちませんでした。

やがて神様が言いました。とても焦っている口調でした。

「国民たちよ。待ってくれ、私の話を聞いてくれ……私は電磁波を使って予知を行っていたんだ。だから、私の予知が外れると言うことは……つまり、そう、隕石か何かが接近していると言うことだ。それで磁場が乱れて――」

「もういいさ！ あんたは神なんかじゃない！」

「こんな機械に頼った俺がバカだったよ！」

「ぶっ壊してやる！」

神様は最後にシンとアトーネにこう言いました。

「すまない、二人とも。私は君たちの質問に答えてやることができなさそうだ」

シンが濁いた目で、神様を見上げて最後の質問をしました。

「……それは予知ですか？」

国民たちが一斉に火器やレーザー銃を神様に向けました。様々な色の光線が神に向けて発射されました。光線が当る寸前、神様は今迄で一番神らしい、優しい声で答えました。

「いや、予知ではない……事実だよ」

言葉が終わるか終わらないかと言う時に、神様は集中砲火を受け、あちこちで火花が散りました。それとほぼ同時にシンはアトーネの手を取り駆け出しました。後ろで、パイプやチューブが破裂する音、ガラスが粉々になる音が聞こえました。

二人は何とか無事にセルードから脱出できました。

アトーネはセルードの最上階を見上げました。そこでは爆音と炎が入り混じっていました。

次の日、朝早くシンとアトーネはその星を出発しました。

宇宙船の中で窓の外、たった今出発したばかりの星を見て、シンが呟きました。

「……アトーネのおじさんの手がかりは、またゼロかあ……」

「まあ、しょうがないよ……神様に会えたんだから、きっとおじさんにも会えるよ」

「……そうだね」

二人を乗せた宇宙船が星を離れた数時間後、巨大な隕石がその星に衝突しました。星の生命態はほぼ死滅してしまいました。

神の予知はやはり現実のものとなったのです。